マウス☆ピース

フィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マウス☆ピース

【Ｎコード】
Ｎ４８９２Ｌ

【作者名】
フィア

【あらすじ】
喫茶店『マウス☆ピース』。それは、個性豊かな女の子達（＋野郎２人）がそれぞれの思いを抱えて働く青春の舞台……なんて事はたまにしかありません。いつも馬鹿やってる若者達の、はちゃめちゃドラマです。

一万ＰＶありがとうございます！　これからも頑張ります！

プロ☆ローグ（前書き）

とあるツンデレヒロインのお店ネタに触発されて書きました。アニメ化したらしいのですが、見てません。それでも似た内容だったら、指摘を感想に書いてやって下さい。
それではよろしくお願いします。

プロ☆ローグ

そこには、ネズミがいた。灰色の毛並みのいい無数の糸を纏い、暑い夏にはいささか辛そうだった。
左右にある、真っ直ぐ伸びる三本の髭。真っ黒な鼻はまん丸く、触るとふにふにしそうだった。
明らかにネズミなのだが、明らかにネズミじゃない理由が、この生物にはあった。
何しろ身体のサイズが半端なくデカイのだ。そのサイズ、おおよそ１メートル５０センチ。
いくらなんでもデカ過ぎるだろう。
その正体とは……。

「バカッ！あんまジロジロ見んな！」

ま、ただの生意気なネズミコスプレ女子高生なのだが。

喫茶店、『マウス☆ピース』の今日の開店は、このツンデレ少女の恥じらいで始まった。

1　開店（前書き）

なんかめちゃくちゃ長くなりました。プロローグの時の短さは一体……？

1　開店

「いい加減その暑苦しいの、脱げば？今年は地球温暖化のせいでメチャクチャ気温が上がるって話だぜ？」

「あほ！これ脱いだらあの恥ずかしい服着なきゃいけないでしょ！……、もうこのバイト辞めたい……」

生粋のツンデレ、甘味エアルは顔を真っ赤にしながら反論してきた。ちょっと可愛い。店内（まだ準備中だが）なのにも関わらず、俺はエアルの頭を撫で……ようとして、左手で払いのけられる。

ちょっと傷ついたが、気を取り直し、再びエアルに話しかける。

「今どき、メイド服が恥ずかしい奴なんてお前くらいだぞ？それにそのカッコも十分目立つっていうか恥ずかしいと思うが……」

俺は顔だけ出ているぬいぐるみ生物を一瞥する。周りのメイド服＋ネズミ耳の女の子達の中に、ぽつんとシミのように浮いているこの灰色ネズミがいる様子は、いつ見てもシュールである。

「この格好は護られてる感っていうか……、なんて言うか、落ち着くのよ」

相変わらずモジモジしながらエアルは補足説明をする。こいつの恥じらいだけで、価電の奴は、ご飯１０杯はいけるんだろうな、と思った。

それでも蒸し暑い６月に毛がモコモコしている服を着ていれば、汗でスレンダーな体がさらに痩せこけてしまう。俺はやんわりと思

いついた事を口にしてみた。
「じゃ、俺が価電の奴にお前専用の仕事服作ってもらうように電話してやろうか？」

この提案に、エアルは予想以上に食い付いてきた。
「ま、まぢで？！やった！約束だからね！」

満面の笑みを俺に向けるエアル。その表情に、自然と俺の顔もほころぶ。

「はいはい」

珍しくケンカをしない俺達。今日はずっとこんなカンジで何事も無く時が進んでいくといい……。

そう思えたのは一瞬だった。

「希我くん……、あたしを差し置いてエアルとイチャイチャと……。希我くんがイチャイチャしていいのはあたしだけなのに……！」
殺気を感じて、エアルと二人、恐る恐る首を回して後ろを見ると、そこにはドス黒いオーラを醸しだしていた　いを　が、こっちを睨み付けていた。

「……希我くん……」

「……はい」

「……昔、言ったよね？」

「……何を？」

「……あたしと結婚するって！」
「いや言ってねぇよ！」

そろそろ爆発されると思ったが、まさか有りもしない約束を持ち出されるとは！マズイ！一度大声で自分の意見に反対されると、この少女はスイッチが入ってしまう！

「なのに、仲良くエアルと新婚旅行でハワイで水着で夕日で愛で……、いを　の事なんか忘れて希我くんはハネムーンにレッツゴーなんだね？！」

「まったくもって意味がわからない？！」

「こうなったら……！」

すると　いを　はどこからかナイフを右手に出現させる。……いや、いつも思うがどこから出した？

「希我くんを殺してエアルを殺して、ここにいるみんなを殺して、そしてあたしも殺して！みんなで天国行ってやる！」

はいは……いぇぇぇぇぇぇ？！

そんな声が真面目にテーブルを並べたり、窓を拭いたりしていた愛礎と架奈の口から漏れていた。まさか自分達に矢が飛んでくるとは思わなかったのだろう。……ざまぁ見さらせ、お前らも道連れだ……じゃなくて！

「落ち着け、いを！早まるな！」

「さようならこの世界……そしてこんにちはヘブンワールド！」

「だから話を聞けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」

いをが右腕を真上に持ち上げた、つまり一直線上の俺をロックオンした。あとはその刃物を振り下ろすだけだ。ああ、明日の新聞の見出しは、『コスプレ喫茶で起きた心中殺人事件』に大決定だな。いつか殺されると思ってはいたが、まさかこんなに早くとは……。

まぁ、でもなんとかなるだろ、そう思い、俺は回避の為の行動をとらない。なぜなら……。

この人がいるからだ。

「はい、ストップね、いをちゃん」

がしっ。

いをのナイフを持っていた方の手首を握ってくれたのは、千沙さんだった。

「離してお姉様！みんな殺さなきゃ明るい未来は来ないの！」

いをはあくまで抵抗していた。千沙さんが手首を掴んでいなかったら、いをはナイフを投げてでも俺を殺しただろう。さすが千沙さん。

しかも千沙さんは　いを　を止める言葉すら持っていた！

「……『みんな』って、私も入っているのかしら……？」

「……っ？！」

いをの顔がどんどん青ざめていく。頑張れ、千沙さん。ゴールは後少しだ……！

「ま、いをに限ってそれは無いわよねぇ……。私の事、だぁーーーいすきだもんねぇ……？」

「……」

もはや、いをの顔は言葉で言い表わし難い色になっていた。……あそこまでいくと、なんかかわいそうだ……。千沙さん、怖すぎ。笑顔が黒いです。

そして。

「ご、ごめんなさい、お姉様……」

いをが折れた。当然っちゃ当然だが。

しかし、

「……でも！」

いをはこれで終わらなかった！

「悪いのは、エアルなんです！」

「はぁぁぁぁ？！」

いきなりの責任転嫁にエアルはすっとんきょうな声を上げてしまった。あまりの意味不明さに、俺も驚きを隠せない。

「あたしの前で見せつけるかのように希我くんとイチャイチャイチャイチャと……！あたしが希我くんの事好きなの知っておきながらこれは酷いと思いません？！」

「エアル、謝りなさい」

「ちょ、ちさ姉？！」

しかも何故か、千沙さんが　いを　側についてしまった。

「人の恋路をジャマするなんて……ふざけるのもいい加減にしなさい！」

「え、何？真面目に言ってるの？」

「当たり前じゃない！」

千沙さんが大変憤慨してらっしゃる。……少し価値観がずれているらしい。そして得意気な顔の　いを。千沙さんの怒りの矛先をエアルに向けられて、大変満足のようだ。……全てはコイツが悪いのだが。

そしていつの間にかヒートアップしている二人の言い争い。このカオスな状況をさらに混沌とさせるべく、さっきまで静かだった女も動きだした！

「寺岡！さっきから聞いてりゃ、的外れな事言ってんじゃねぇよ！」

「……なんですって？！」

珍しく架奈の挑発に乗る千沙さん。三人の言葉がどんどん悪くなっていく中、もうひとりのバイトは……。

「うぅ、ボケるタイミングを失ってしまいました……」

……無視しよう。面倒くさい。

店内がどんどん騒がしくなっていく中、俺の肩にぽん、と大きな手が置かれた。

「長谷川さん……」

「希我……」

俺は大柄な料理長の顔を見る。彼はなにもかも任せろ的な笑顔を俺に向け、言った。

「大変だな、お前の店」

「いやあんたが働いている店なんだけど？！！！！！！！」

馬鹿しかいねぇのかこの店は？！

そう思ったところで、ドアの鈴がちりりんと鳴った。来客だ。

「こんちはー……ってあれ？まだ準備中だった？」

若い男性の客だった。俺は急いで言葉を返す。

「いえ、そんな事無いですよ」

いつの間にか、店内はＢＧＭの音楽だけが聞こえていた。……良かった。仕事は本気でやるのがモットーな俺の思いは、しっかり届いている。とても嬉しい事だ。

店長代理としては。

『いらっしゃいませ！』

さて、皆さんお待たせしました。

ここが。

『ネズミコスプレ喫茶』

俺達の家。

『『マウス☆ピース』です！』

ごゆっくりどうぞ。

1　開店（後書き）

っていうか、むしろこの話がプロローグな気が……。気のせいですねうん。

2　身辺整理（前書き）

いやぁ。

……長い……。

一2　身辺整理

「いらっしゃいませ！」

「ごゆっくりしていってください！」

「こちら、メニューでございます」

「チャーハンセットB一つー！」

「あいよ！」

「あの、俺が頼んだの、フレンチトーストなんだけど……」

「え、す、すみません！ちょっと愛礎！」

「ひぃぃ！ご、ごめんなさい！」

ネズミの耳、鼻、髭を装備したメイド服共が、店内を所狭しと走り回っている。

今日も賑やかな午後だ。この店が喫茶店である以上、賑やかじゃなきゃいけないのだが。

……っていうか愛礎、どうやったらパンの名前と炒飯を間違えるのだ？理由があるなら俺に教えてくれ。

ここでバイトを始めて1ヶ月ちょっと経つ塔吹愛礎（とうふうあいそ）は、今でも高い確率で何かやらかすドジっ娘ちゃんである。

ショートな茶髪を桜の花の形のヘアピンで可愛らしく表現しているが、対照的にオレンジ縁の楕円形メガネはいかにも優等生であるように見せる。……実際にはあまり成績は良くないのだが。

引っ込み思案の彼女がこの店でバイトをしたいと言いだしたのは、4月の後半、エアルと、「今日も部活で遅れる」みたいな話を2年3組の教室でしていた時だった。「何に遅れるにょっ？」と、まるで緊張して舌を噛んでしまったような話し方で愛礎が後ろのドアを開いて聞いてきたので、素直に答えてやったら、「私も働きたい！」とかなり汗を掻きながら叫んでいた。

一応、ウチの学校はバイト自由だし、店の方も中学生以上からなら働けるので、全く問題は無い。

そんなこんなで彼女はウチでほぼ毎日働いている。

しかし、何故愛礎は、クラスが一緒でも無い（確か2年5組）し、それどころか話した事すら無い俺に話し掛けてきたのだろう？未だ謎な事だ。

また、愛礎が（何故かスキップで。そんなにバイトができるのが嬉しいのか？）離れていった後で、エアルが「……お人好し……鈍感……」と呟いていた理由も謎である。

……何だったんだ、あの時の愛礎は？今度聞いてみようか。

そして休憩時間（ウチの店は４時から２０分間休みを設けている。自慢じゃないが毎日忙しいので）。店の奥の畳の部屋が休憩室である。バイト３人がお茶を飲んでいる間、架奈は愛礎を叱りつけていた。

「も～、そろそろ仕事を覚えてもいい頃なんだけど……」

伊倉架奈（いぐら かな）。この店で唯一の正規の女性店員（２１）である。

金色の長髪は腰まで届いていて、揺れるたびに眩しい。背丈は推定１７０センチ、しかし高身長の割に顔は高校生のようなやんちゃさが残っている。

一応、一番年上という事で、彼女には《チーフ》という役割についてもらっている。

何か問題があったり、店員がミスを犯してしまった場合、彼女が真っ先に謝る。それ以外にも仕事は山ほどあるが、最近は愛礎のおかげで、先ほど述べた謝罪の仕事しかしていない。

……いや、もう一個あった。

「ちゃんとオーダー用紙に書きながら注文を取ること、っていつも言ってるでしょ？手元にあるのに存在を忘れるとか、あり得ないわよ？」

ミスった子の叱り役。損な役回りで本当に申し訳ないと思うが、本人が平気平気と言って聞かないのだ。みんなより多く給料貰ってるんだからこれくらいはしなきゃ、と。

そうは言うものの、架奈以外はバイトなので、給料配分が彼女のが高いのは当然だし、みんなもそれがいいと同意を得ているので、そう言う事を笑顔で言われるといささか心苦しいが、他にチーフをやれる人間がいないので、彼女の優しさに甘えさせてもらっている。

「ごめんなさい……」

それが分かっているので、ウチの店のみんなは彼女に怒られたら素直に謝ることにしているらしい。……自分で言うのも何だが、いい職場だ。

だから架奈も、

「……次からは気をつけてね？」

すぐに許す。いや、ホント、いい職場だ。

「よ、良かったぁ～～～……。今回も許してもらえたよぉぉ～～～……」

息を吐きながら安堵する愛礎。そんなメガネ少女に、この店一番の大人が安心させるために口を開いた。

「良かったわね、愛礎」

寺岡千沙（てらおかちっさ）。俺達が通う県立水市（みずし）東高等学校３年６組２１番、長い黒髪が特徴的な、高校生にして美人という貴重な肩書きを持っているウチの店の一番の売れっ子……強いて言えばＮｏ．１である。全

国に可愛いだけの子なら山ほどいるだろうが、美人はそうそういない。

「でも、あんまり気にしちゃダメよ？愛礎は、みんなより少し鈍臭いだけなんだから」

おまけに性格まで本当に学生か？と疑問に思うほど大人びていて優しいため、みんなに下から目線で見られている。例えば……。

「そうそう、ちさ姉の言うとおり。あたしなんかバイトを始めた頃はしょっちゅう怒られたわよ」

『ちさ姉』。エアルは千沙さんのことをそう呼んでいる。もう一人のバイトは『お姉様』と、崇め……呼んでいる。

にしても、さっきの会話に、ちょっと説明不充分があった。早速ツッコんでみよう。

「いや、それでもいきなり客に向かって『あんた何様？！』って言ったのはたぶんお前くらいだぞ？」

「う、うるさい！バラすなカス！消えて無くなれ！」

むかっ。

……そろそろ俺の紹介もしよう……。

俺こと橘希我（たちばなきが）はこのネズミコスプレ喫茶『マウス☆ピース』の店長代理である。とある理由（たいした理由じゃないが）で青春を、

この店の経営と、学校で所属しているボクシング部の活動に捧げている。

学校は3人と同じ、東高で、クラスは2年3組。茶黒な髪とボクシングなんておっかない部にいるため、よく他校の不良に絡まれる。

まぁ、路上でのケンカで負けたことは1回もないが。

そんな俺の性格。

……キレやすい。

「あぁぁぁぁ?!仮にも店長になんて言葉遣いだ、あぁあんん?!」

「あんたの肩書きはリアルで仮でしょうが!!代理でしょ代理!てんちょう　だ・い・り!自分ひとりじゃ一銭も稼ぐ事の出来ない男が調子乗ってんじゃないわよ!」

「な、何だとぉぉぉ?!」

「黙れ凡骨!それは事実でしょうが!」

「くっ……!でも……!」

「だいたいあんたはそういう所が……」

「……」

だが、俺の特徴のひとつである童顔のせいで、俺の怒りは反抗期

の中学生程度に見えるらしい。おかげさまで今のようにすぐカウンターを喰らう。……また少し、俺の心にヒビが……。

俺は助けを求め、周りを見る。

俺とエアルのケンカに、愛礎と千沙さんは、完全に置いてきぼりだったようで、千沙さんはしょうがない、という様子で泣き止んだ愛礎に、接客のイロハを再びたたき込んでいた。

架奈にいたっては無視。鏡を見ながらネズミ耳カチューシャの向きを直している。

そして最後のひとりは……。

「だいたいこの店はオフゥェァア?!」

またも俺を言葉でいぢめようとしていたエアルに、

ドロップキックをかましていた。

メイド服を掛けておくクローゼットに頭から突っ込んでいったエアル。南無。

「あたしの旦那様をいぢめるなんて、偉くなったものねエアル。この人をいぢめて、蹴って、踏んでいたぶって泣かして殴って焼いて煮て食べて砕いて舐めて飲み込んで排出して刻んで潰して、それでも許されるのは、あたしだけなんだけど?」

「誰も許可してないんですけど?!!!」

この危ない発言を繰り返す少女は、前田(まえだ)いを。

ヤンデレな彼女は、薄い灰色の髪をツインテールに束ねていて、跳ねると可愛らしい小動物な女の子。

小柄で可愛くて、しかもツインテール！俺にとってモロストライクゾーンなのだが、何しろ性格がアレなので、最近はなるべく近寄らないようにしている。

しかし、離れ過ぎると今度は勝手に彼女が暴走するので、非常に扱い辛い。今の俺のストレスの９割が、いをのせいと言っても過言ではないくらいだ。

さらに、こんなに愛をイヤと言うほど見せる彼女を自分の恋人にしたくないのには、もうひとつ理由がある。

「いつつ……。この……！ちょっといを！最近の、っていうかいつものあんたの行動は度が過ぎてるわ！だいたい何よ！あたしより２つも年下な奴に、何で偉そうとか言われなきゃいけないワケ？！意味不明なんだけど？！」

紹介が遅れたが、この典型的ツンデレが、甘味(かんみ)　エアルだ。

赤茶のショートの髪のてっぺんには、黄色いリボンがちょんと乗っかっている。体つきはとても細いが、胸等は年相応で、背も高校生の平均である１５２くらい。

しかし、彼女を象徴とするものは、全て隠れている。

理由は簡単。みんながメイド服を着ているのに対し、コイツだけネズミの着ぐるみを身に纏っているからだ。

着ぐるみっていうか、パジャマみたいに、全身灰色の首部に顔の大きく空いたフードがくっついている服なだけなので、決して着ぐるみではないが、めんどくさいので7年間そう呼んでいる。

さっきも言っていたように、本人曰く、「メイド服なんて恥ずかしいの着れるか！」、だそうだ。今どき稀有なヤツだ。

家は、この店の隣。小４から今までずっとクラスが一緒のいわゆる幼なじみだ。

こいつの説明はだいたいこんな感じだ。今はさっきの説明を補足しなければならない。

「うるさい！精神年齢だったら、エアルの百万倍は大人よ！」

「な、何ですってー？！」

そう、俺がこの自称『希我さまの嫁』を彼女にしたくないのは、この子が、中学三年生だからだ。正真正銘の１５歳なのである。

俺はロリコンではないし、ロリコンに見られるのも嫌なので、断固として今現在を共にしたくないのである。

……さて、これが一応俺の経営する『マウス☆ピース』の全従業員……。

「……俺は？」

「……っ？！は、長谷川さん？！」

……そういやもう1人いた。接客が職業じゃないため、すっかり忘れていた。

料理長、長谷川丹（はせがわたん）。２５歳独身。髪は短く黒で、アゴヒゲが渋い天然形オヤジ。その容姿と雰囲気で、東高の女性（教員含む）の半分のハートを射止めている。本人は彼女を作る気がないらしいが。

……ってか、

「どうして、何で？！あんた人の心が読めるのか？！」

どうやって俺の思考を覗いたのだ？

「？何のことだ？」

「いや、だから、あんたが何でさっきから俺が脳内でこの店のことを整理していたのを知ってるのってことだよ！まさか超能力者？！」

「いや、お前がずっと1人でぶつぶつと人物紹介をしていたからに過ぎないが？」

……何ですって？

「……いつから、俺独り言タイムに入ってました？」

「休憩に入る少し前。そんときお前は確か愛礎がドジっ子だとかどーとか言ってたな……」

「……最初からじゃねーか！」

俺は長谷川さんの胸ぐらを掴んだまま、彼の頭を前後にぐらんぐらんと揺らした。

「な、な、に、しや、が、る……」

「何でもっと早く教えてくれなかったんだよ！俺、変な目で見られ……って！まさか！」

俺は周りを見る。するとそれには不審者を見るかのような眼球が10個5セットずつ。あの、俺への愛を語らせれば軽く日が越せるいをすらも、できれば近寄らないで下さいみたいなジト目で俺を見ていた。

絶望の門をくぐろうとする俺に、長谷川さん。

「店員はおろか、前半は客まで聞いてたぞ」

……追い打ちをかけてきた。

「う、う、嘘だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

バタっ！

ここで俺が倒れたのは、自分を守ろうというせめてもの生存本能だったのだろう。……できればあと5年は寝かせて欲しい。

そう思ったのに、彼女達は1分もそれを許しちゃくれなかった。

「起きなさい！まだ仕事は残ってるでしょ！……さっきの事は謝るからさ……、って！勘違いしないでよね！本当はあんたが悪いんだけど、しょうがないから謝ってるのよ！感謝しなさい！」

「希我くん？起きてくれないと、あたしが大事なところ、ぺろぺろしちゃうよ？……うん。やっぱ起きなくていいや！」

「希我君。起きないと貴方の寝顔、あたしのブログ、サイト、よう○べ、に○にこ、その他もろもろの場所にばら撒いちゃうわよ？それが嫌なら起きなさい♪」

「き、き、希我くん！起きないと、お客さん来ちゃいます！休憩も終わっちゃいます！……起きないんですか……？……おきてくれないなら、キ！キ！……す。し、しちゃいますよ！」

「……これだけ叫んでも起きないなんて、ありえないわね。みんな、コレは狸寝入りよ。わたし達を騙そうだなんて、いい度胸ね。みんな！引きずってでも、店の中に連れて行かせるわよ！」

はぁーい！

元気な声が聞こえる。

「ってちょっと待てぇ！足を持つなコチョコチョすんなって痛ぁぁぁぁぁ！」

頭を卓袱台の足にぶつけた。……痛い。

ちなみに俺は寝ていることをいい事に、９時に店が閉まった後、元気すぎる女（＋男一人）たちに、コスプレさせられたり顔に油性で何か書かれたりそのカッコで街を歩かされたりとさんざん辱められた。……俺は特に悪いことしてないんだけどな……。

はぁ。

……死にてぇ。

12　身辺整理（後書き）

今回でややこしい説明口調は終わり。

次回からは話が動く予定。

一3　騒動（前書き）

今回は短めです。

一3　騒動

今日は6月7日月曜日。一週間の始まりだ。

さらに部活も無し。今月に入って、五回目の無許可の休みである。大丈夫だろうか、ウチの部活。こんなにテキトーで、活動停止にならないだろうか。日曜には西高との親善試合もあるのに……。

……平気だろ。ウチのガッコ、校則ゆるいし。

俺は自分の高校の校訓を思い出した。

校訓：

『のんびり』

……。

さて、仕事仕事♪

「今日もみんな、頑張るぞ！」

……。アレ？返事がない。

俺は後ろを振り向いてメイド共を見る。完全にそっぽを向いていた。え～。

この前の一件、通称『橘希我身障事件』（俺は認めていない）以来、ここの女子共は俺を完全無視している。いをすらだ。

今や俺が店で話しているのはあの中マッチョ（中くらいのマッチョ。マウス☆ピース造語）の長谷川さんだけである。……さらば俺の一方通行ハーレム。

「さて、今日もみんな頑張るわよ！」

おおーーー！

美少女軍団は、架奈の掛け声にムカつくほどいい返事をしやがった。ああイラつく！

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「お客が来ない！！！」

痺れを切らしたようにエアルが叫んでいた。

店の中は、俺達店員だけである。

3時半から開店するこの店は、客がダムから出る貯水のようにたくさん来る。大げさかもしれないが、多いときにはこの店のある商店街の通りの端から端まで行列ができる。……あの時の売り上げは確か百ま……げふんげふん。

しかし、特に何もない平日に、これほどまで人がいない時がこの店には、休憩以外、なかった筈だ。

「何かあったのかしら。ちょっと近所の常連さんの家見てくるわね」と言って、さっき千沙さんが店を出て行ったきり、何も起きて

いない。俺達はただただ時間を消費するだけだった。

「何で何で何で何でなんでーーーーーー！こないだあんたが一人でぼそぼそ言ってたから？！そうねそうなのよそうに決まってる！土下座しなさいこの犬が！」

「はぁ……」

「……何よ。いつもみたいに突っかかってこないわね……」

「いや、マジで俺の所為なのかと……」

そうだとしたら、まずこいつらではなく、お客さんに土下座しに行かなければならない。これでも一応店長（代理）だ。自分の不祥事は自分で責任を取って片付けなければ。

というか、こいつ、6日ぶりに俺と話したな。異常事態な為、無視していた事をすっかり忘れているらしい。

「あんた、変なところで律儀よね」

「そうか？」

「律儀っていうか、おせっか……」

バァーーーーーーーン！

俺とエアルが話していたら、いきなり店のドアが開いた。

「……千沙さん？」

そこにいたのは寺岡千沙だったのだが、乱れた髪とゼェゼェと息を吐いて俯いている所為で、一瞬誰だか分からなかった。

ずんずんと店の中に入ってくる千沙さん。

そして俺は手首を掴まれ……痛い痛い痛い痛い！

「ちょ、千沙さん！力強すぎ！余裕でこれ林檎潰せちゃうから！」

「いいから来て希我君！」

そして俺は冷房の効いていない店の外へ駆り出された。それに続けて客は来ないだろうと思ったらしい店員共もついてきた。

水無月の蒸し暑い熱気が俺を包み込む。

これからもっと暑苦しい状況に置かれるのにもかかわらず、能天気にも「千沙さんの手、すべすべだな」と、このときの俺は思っていた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

喫茶店『マウス☆ピース』は、水市の西区と東区のちょうど境目にある店だ。

商店街の一角でもあるこの店は、周りの環境によって売り上げを伸ばしてきたと言っても過言ではない。

しかし、市の中心部にあるのはもちろん喫茶店だけではない。

俺の目の前にある「水市公民館」も、西区と東区の境目にある。

この公民館は、図書館、博物館、水族館、体育館、プール、テニスコート、ｅｔｃ……、とにかく、「公民館」とは名前だけの、何でも付いている巨大な町の遊び場・研修場である。ここに来るだけで小学生低学年の遠足や社会科見学は済んでしまうという、この町のウリのひとつである。

しかし、この公民館の正しい入り口は、設備を勝手に壊されないように、この正面ロビーだけである。そのおかげで、人がたくさん集まるのだが、

今日はざっと３００の人間がロビーの前で揺れていた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「よく見りゃ東高と西高の生徒ばっかじゃねえか……」

視界の約５割が、東高の青が主体のブレザーと西高の赤いブレザーで埋めつくされていた。あとの３割が野次馬で、残りは風景だ。

どうやらウチの店に来る連中もこの野次馬の中にいるようで、常連客の幾人かは確認できた。まったく、困ったもんだ。

しかし、何だってこんな事態になっているのだ？異様な空気に、ウチの女共は少々怯えていた。……俺には強気なクセに、生意気な……。

さて、俺は今あるがままの状況を整理する事にする。

目の前に見えるのは赤と青、二つの色の集団。交わる部分で唾を飛ばしながらお互い口論している。

他の生徒もその交差地点の連中に同調して、何かに対して怒りをぶつけている。

そして俺は千沙さんに掴まれたままその争いの中央へ……って、え？

「みんな！連れてきたわよ！私達の希望の星を！」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！

大地が、揺れた。

俺、どうなるんだろう？

―3　騒動（後書き）

この話は録っておいたエンジェ●ビーツ（6）を見て泣きながら書いていたので、少々自分の思い描いていたカンジになりませんでしたが、こっちのがいいものだったので、このまま入稿しました。

自分のテキトーさに我ながら唖然ｗｗｗｗｗｗｗ

14　予想外（前書き）

結構遅れて投稿。ごめんなさい。

―4　予想外

私、寺岡千沙は自分がバイトを始めて約2ヶ月の喫茶店『マウス☆ピース』に客が1人も訪れないという異常事態を不審に思い、現在、店周辺を調査中である……、

そう言えば聞こえはいいが、私は給料が貰えないの危惧しているだけだ。利己主義な人間の典型的思考。自分で自分が嫌になる。

しかし、あの店が私の中で特別になりつつあるのも確かな事だ。真面目でいい人間が集う場所。店員も客も、話していて落ち着く。

いつか、本当にいつか、自分の環境を、彼らなら相談できるかもしれない。言わないに越した事はないだろうが。

そのためには、まず金だ。

金を貯めて、来る日に備えなければ。

いろいろ考えている内に、近所の常連客である鈴木さんの家に着いた。

まず彼がいるか、そして何故店に来てくれないのか、調べなければ。

彼は毎日5時くらいには一人でコーヒーを飲みにくる、れっきとした店の常連客だ。彼なら何か知っているかもしれない。

しかし、チャイムを鳴らしても、鈴木さんはいなかった。

（やっぱり、どこかに出かけているのかしら？でも、客全員が出かけているなんて事は無いわよねぇ……）

すると、

「おい！早くしろよ！」

「ま、待って下さいよ……って千沙さん？」

「キミは確か……田中君？だったかしら？」

「ハイ！希我がいつもお世話になっています！」

希我君と同じクラスのボクシング部の田中君だった。もう1人は私と同じクラスでボクシング部長の武藤君。

「寺岡？こんな所で何やってんの？店は？」

「それが、かくかくしかじかで……」

「……そうか大変だな……って分かるか！それで伝わると思ってんの？！」

ノリツッコミが上手いクラスメイトだった。

私は彼らに自分の状況を順を追って説明する。私の話を聞いた2人はガラに似合わない思慮深い顔をし、彼らの状況を話してくれる。

「あのさ、今部活の仲間から電話があってさ。こ」

「公民館でウチの生徒会長と西高のヤツらがトラブったらしいんですよ」

「……おい。今俺が話して…」

「原因はまだ分かりませんが、ものすごい口論らしいんです。そこにものっそい数の野次馬がいるらしいので、きっとそのお客さんはその中にいるかもしれませんね」

「……」

……。

「田中君」

「ハイ！」

満点の笑顔での返事。私は言葉を繋げる。

「大事な情報を教えてくれて、本当にありがとう」

「いえいえー♪」

「それとね、」

「はい？」

「死亡フラグよ」

「？何の話…でぅふ！」

「……」

「ち、ちょ、せ、先輩きまっちゃってます！ギブギブ……ふぅ、ってぎゃあああああ！！！！！」

般若と化した校内ケンカランキング１１位のボクシング部長に、田中君が文字どおりボコボコにされたのは、言うまでもない。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「聞いてよ千沙！コイツ等最悪なのよ！」

「はぁ？！ふざけんなよ？！だいたいお前等がちゃんと礼儀をわきまえていれば、俺達だってとやかく言わなかったさ！」

「はぁ～？！礼儀だぁ～？！調子こいた風にそっちがあたし達の領地勝手に使ったんでしょーが！」

「たったそれだけのことで怒るヤツの、どこに礼儀があるんだよ！調子乗ってんのはそっちだろうが！」

「何ですって？！」

「何だよ?！」

「ねぇ！「」おい！」

『どっちが悪い?！』

知らないわよ。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

何故か口論していた東高と西高の生徒会長を見た私はするりと方向転換。　私は逃げるように一度現場から去った。「ちょっと待って！」という言葉が耳にぶつかったが、無視だ無視。

私は鈴木さんを見つけた。一緒に行動しているボクシング部2人が言っていた通り、この騒動を見に来ていたよう、……というか、施設のすぐ側に家があるので、この騒音に対して一言文句を言ってやろうとして玄関を出たら、この規模の人数に圧倒させられたらしい。

とりあえず、今までの状況を把握するべく、事件の最初らへんからいたらしい鈴木さんに、話を聞くことにする。鈴木さんは、微妙な顔をして、ゆっくりと口を開いた。

「んで、今から話す事が、俺が1時間粘ってようやくこの馬鹿共から得た今回の事件の内容だよ」

事の顛末の原因は、些細な争いだったそうだ。

暗黙の了解として、私達はこの公民館の使用区域を東高と西高で分けていた。お互い仲良くやろうという善意からのルールだった。

それが今のように悪意の促進を加速させるだけの冷たいシステムになってしまったのは、今年の東高の生徒会の発案が原因だった。

「西高より良い学校にします！」

それが、今年の生徒会長（女）の生徒会選挙の公約だった。そして、それが西高との果てしない因縁関係の始まりだった。西高の人間は、事あるごとにケンカをふっかけるようになった。東高も同調してそのケンカを買った。全てはあのあっぱっぱーな生徒会長のせいだ。

そして今回の事件。今日は図書館で調べ物があるということで、彼女らは図書館に来ていた。

しかしそこには西高の生徒達（この男も脳みそがピンク）が自分達の領地で漫画を読みふけっていた。

当然ウチの馬鹿トップの薄い額の血管が切れる訳で。

彼女等は口論を始める。

その規模は通行人や帰宅途中の生徒までかき集め、一つのパニックになってしまった。今では関係のない生徒まで不平不満をお互い訴えている。おまえらの方がバカだとか、そんな事を……。悪いリーダーに完全に洗脳されているようだ。

3時から始まったこの騒動、2時間半が経っても、言い争いは止まらない。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「だいたいこんな感じ」

……。

「……最悪だわ……」

私はガックリと肩を落とす。私がうなだれている間、田中君が質問をしていた。

「ケーサツは何してるんですか？いやむしろ、誰でもいいけどこの暴動の仲介をしてくれる人間はいないんですか？」

確かに。でもまぁ警察は……。

「いや、警察は完全に会長に逆らえないから」

私より先に、武藤君が口を開いた。

「な、何でですか？」

「まぁ、それは今度にしようか」

私は今さほど重要ではないと考えて、田中君を制する。田中君も、

それが伝わったようで、口をつむぐ。

「で、仲介してくれる人間もいたにはいたんだけど……」

「あーーーーーーー！」

いきなり武藤君が奇声をあげた。ものすごく驚いたのだろう、彼の目はこちらが驚くほどやばかった。瞳孔が開きそうだった。

「どうしたのよ、急に……」

「あそこにいるの、ウチのボクシング部じゃね？！」

武藤君が指差したその先には、山積みになっている人の屍が……。確かに、見たことある顔だった。しかも場所は、ちょうど人ごみの中心、つまり、馬鹿生徒会長たちの争いの少し先の場所だ。

何故さっき気づかなかったのだろう、と思ったが、あの大衆の混雑っぷりなら、象をも隠せただろう。しょうがない、と思いつつ心の中で謝っておいた。ごめんなさい、さっき踏んだ気がするわ。

そしていきり立つ武藤君。……多分ではあるものの、踏みつけてしまった事は言わないでおこう。

「あいつら、いったい俺達の仲間に何しやがった……！いくぞ田中！」

「うぇ？は、はい！」

二人は人ごみを掻き分けて行ってしまう。

「待つんだ君達！」

鈴木さんが二人を呼び止めるが、彼らはもう遠く。

「おい！清水！見原！河合！下山！おいどうしたんだよ起きろ！」

「先輩！しっかりしてください！せんぱ……！……先輩？先輩！！」

「ちょ、ちょっと待てよ。じょ、冗談だろ……？なぁ、今朝みたいに馬鹿な顔見せてくれよ……おい、おい！清水ぅーーー！見原ぁーーー！河合ぃーーー！下」

『うるさぁあぁあああああぁいいいいいいいいいい！』

バスっ！ぼすっ！

二人の顔面に青紫色のパイが投げられた。

ぎゃぁあああぁぁぁぁぁぁ…………………。ばた。

「……仲介してくれる勇敢な者達は、ああやってごみのようにドリアンパイ（果汁８２％）を喰らって散っていくんだよ……」

「…………臭い」

鈴木さんの涙声に、私は引きつった苦笑いでテキトーなことしか言えなかった。

すると、連中私の存在に再び気づいたようで、ずんずん近づいて

きた。……文句の一つでも言ってやろうか。

「ねぇ、あなた達。ボクシング部のみんなが……」

「ちょっと聞いて千沙！こいつら終いにはウチの高校のカップルがイチャイチャしすぎとか言ってきたのよ！サイテーじゃない？！ムカついたから罵倒してやったら、ウチのボクシング部にめちゃくちゃ臭いパイを投げてきたのよ？！今回の件を週末のボクシングの親善試合で決めようとしていたのに！部内ランキング1位と2位がいないんじゃ話にならないわ！」

……。

「待ってて、会長！今すぐにウチの馬鹿店長連れてくるわ！その人の恋路を馬鹿にする変態共を抹殺するために！」

『何だと？！』

「店長？……そう、橘希我ね……。お願い千沙！彼を！」

「ええ！任せて！」

この後の鈴木さんの話によると「ええー、千沙ちゃんあんなキャラも持ってたんだ……大人っぽいイメージだったのに、なんかショック……」、だそうだ。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

「ッてわけなのよ！信じられる？！」

「信じられませんねぇその展開！田中達の事、完全に無視じゃないですか！」

とんでもない内容だった。ひどい、ひどすぎる。

「それに、今度の試合……」

「そうよ」

なんか会長様がしゃしゃり出てきた。……俺、この人あんま好きじゃないんだけどな……。

「あっちのバカ高のボクシング部トップに勝って、今度こそどちらの高校が上か、ハッキリさせてやるのよ！」

予想通りで、予想外の言葉。

「……はぁ」

俺は短く、誰にも聞こえることの無いようにひっそりとため息をつく。

……もう、どうにでもなりやがれってんだ、バカヤロー。

―４　予想外（後書き）

ちっさは　きゃらが　ほうかいした！（笑）

ー5　宝石（前書き）

文化祭でＭ．ｒ草食系男子に選ばれたりした作者。

にぎやかな所より静かな所が好きな作者は、立ち入り禁止の教室でずっと寝てたり、この小説を書いていたりしたら……。

偶然って恐ろしいですね。

通りかかった教師にこの小説書いてることばれましたよ。

弱みを握られた作者は、むなしい気持ちになり、後半を適当に仕上げました。

あぁ。鬱だ。

15　宝石

「話を整理するわね。勝ったほうが相手の高校より何もかもが上位と認められ」

「負けたほうが、この公民館を使えなくなる」

そこら中から不平不満が漏れる。何しろ勝手に騒動の先頭が決めたことだ。民主主義な国であるからにも関わらず、なんたる横暴かと訝しげるのも無理はない。

それでも話は壊れたベルトコンベアーにどんどん持って行かれる。

「じゃあ選手はウチの希我君とそっちの……」

「小松（こまつしょう）翔だ。ウチの学校で、一番強いボクシング部だぜ」

「ちょ、荒井さん……！」

すると、あちらの荒井と呼ばれた男子に引っ張られて、気の弱そうな少年が出てきた。俺が知らないと言う事は、一年生だろう。一個下でトップか。どれ程の実力だろう？

「ふーん。そんなチビでも勝てちゃうほど弱いんだ、あんたの所のボクシング部。ざっこ」

また生徒会長がケンカを売る。あーもうこの人は！

しかしその安っぽい言葉に彼ら乗らず。

「……ふ」

一笑に付した。

「な、何よ?!」

「一つだけ言っておくが、

こいつは、強すぎるから、気をつけろよ」

そう言って、奴らは夕闇の奥に消えていった。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「大変なことになっちゃったね、希我君」

「いえ……。そんな事よりも、迷惑を掛けてしまい申し訳ありません」

苦笑する鈴木さんを前に、俺はただ頭を下げる事しか出来ない。

「ボクシング勝負か……いつもの事だから、怪我はしないでとは言わないけど、無茶だけはしないでくれよ?」

そう言って、彼はポケットから少し大きめなお守りを取出し、俺

に差し出す。

「これは……？」

「さっき家から持って来たんだ。大事な勝負がある時、俺達はいつもこれを手にして戦ってきたんだ。それを持って負けた事はないし、怪我をした事もない」

自慢気に話す鈴木さんは、照れくさそうに笑った。

「そんな大事なお守りを、俺に……？」

「言ってるだろ？君に怪我されると困るんだよ」

何故そんなに気にかけてくれるのか疑問だが、好意である事は確かだろう。素直に礼を言っておこう。

…と思ったら。

「店長不在で店が閉まったら、俺がメイド服少女……もとい、みんなに会えないじゃないか！」

目を釣り上げて俺にどーでもいい事訴えて来た。

……殺してやろうかこの親父。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

とりあえずお守りを受け取り（後で絶対ドブに捨ててやるが）、俺達は店に帰った。客足も戻ってきたので、それからはいつも通りの営業をした。

そして閉店後、みんなで今日の事を話し合う。既にみんなは制服を脱ぎ、それぞれの私服を着ている。

ちなみに、長谷川さんは事態についていけないので、さっさと帰った。まぁあの人は事件にりんごとみかんの収穫シーズンの距離ほどかすってないからな。

「それにしても、アンタ良くあんなへんてこの内容の勝負受けたわね。いつもだったら、すぐキレるのに……」と、エアル。

「……俺なりに、今回の件で、西と東の高校戦争に終止符を打とうかな、なんて思っちゃったり」

「ふん。ヒーロー気取りのミュータントが。調子に乗るんじゃないわよ」

「何で急に禁〇目録？」

っていうかそれ、完全に俺を主人公として認めちゃってる発言だぞ。俺には幻想は殺せないが。分かっているのだろうか。…分かっているのだろう。こいつ、ツンデレだから。

「それで、作戦は？決まってるの？」これは架奈だ。

「決まってるには決まってるんだけど……。それは、俺が試合に勝って初めて条件が揃う事なんだよ。だからまずはそこをクリアして

からだな」

「え？教えてくれないの？」

心外そうな顔を俺に見せる架奈。……やめてくれ。心が痛い。

「うーん。あんまお前らがこっちの作戦を知っていても成功しないんだ。俺のプランでは、教えるのは……」

俺は視線を横にスライド。二人の女を見る。

「愛礎と、千沙さんだけだ」

「ほぇ？！」

予想外の展開に驚きを隠せないご様子の愛礎。そして、黒髪ミステリー女はと言うと……。

「……うふふ。当事者様の考えたカス共に制裁を与える作戦に、私も参加できるのね……。うふふふふふふふ。うふふふふーーーーーーーーーーーー♪」

完全に壊れていた。あの人は今回の件が終わるまで、ずっとあのキャラで暮らしていくのだろうか。もし店の客への対応もあんなだったら、クビ宣告の通知も考えねばならない。

「……考えあっての事なの？だったら、第三者のあたしがとやかく言うこともないわね」

そして、架奈は店のドアへと歩き出す。すれ違いざまに「なんか

あったら、何でも言うのよ？」と、俺だけに聞こえる声で励ましてくれた。俺は、口の形だけで感謝の言葉を述べた。彼女は満足そうな笑みを浮かべ、ドアを開けて外に出た。蒸し暑い空気が店に充満する。

エアコンの温度を上げようとして、リモコンを見ると、もう既に電子時計は１１時５分になっていた。いい加減、みんなを帰らせることにする。

「さて、今日ももう遅いし、これでお開きとしよう」

残りの東高ガールズを帰らせ、店のテーブルの上に乗っかる。……あんま経営者としてはよろしくない格好だが、いろいろありすぎて疲れていて、いすに座るのが面倒だったのだ。意味もなく足をぶらつかせる。

明日からの一週間は、毎日死ぬような練習をしなければならない。店のことは、架奈に任せるとしよう。少し、家電のヤツにも相談するか。まぁどうせ「この電話は現在、使われておりません」になるんだろうが。

「まぁ、あいつには頼らなくていいか。はる姉に電話しとけばいいし。風呂にでも入るべ」

俺はテーブルから降りて、二階へと続く階段がある調理場へと足を進める……。

「希我くん……？」

「……っつ！」

な、何だこの感覚。で、デジャヴだ。

それがいつのことだったか思い出そうとする、その瞬間。

……ガッ！

何かに足を掴まれた。

「にょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお？！」

俺は反射的に下を見る！学校の黒いズボンの足首らへんを、少し小さめの手が握り締めていた！耳を澄ますと、女の子のすすり泣きが聞こえた！

「しくしくしくしくしくしくしくしくしくしくしくしく。」

「な、何してんだよいを！」

今回空気だった、前田いをだった。いないと思ったら、こんなところ（テーブルの下）にいたのか。というか、こいつが公民館の前に行ったのかすら俺は覚えていない。ホント、何してたんだ？

「な、何してんのかなぁ？いをちゃん？」

「ぐすっ。そんなおだてだ調子で言ったって、あたしは許さないよ、希我くん。……忘れてたんだよね？あたしの事」

「い、いや。そんな事ないよ？」

　するといをはがばっと体を浮上、俺の股間にヘディングしやがった。俺のダディがぁぁぁぁぁぁぁああああ！

　俺が悶絶しながら床をごろごろ這いずり回っていると、いをが一言。

「嘘だっ！」

　ひ〇らし？

「あたし、呼んでくれるかな？って、ずっと、それも６時間もテーブルの下で、体育座りしながら待ってたのに！何にも言ってくれなったじゃん！」

「うっ！」

「それに帰ってきても今度は架奈とイチャイチャするし！」

「いや、別にそんな……」

「それに、エアル達が帰る時だって、『残りの東高ガールズを帰らせ』とか何とかほざいてたじゃん！」

「え？！ま、まさか俺、またぶつぶつと喋って？！」

「ううん。あたしが地の文読んだだけ」

「それやったら小説的に終わりだろぉがぁあああああああああああ

！」

しれっととんでもない事を言いのける2個下の少女に俺は唾をつけんばかりに叫ぶ。しかし、（いつものことだが）いをは引き下がらない。

「大丈夫だよ。きっと「ぴーーーーー♪」が入るから大丈夫！このことに関しては全くと言っていいほど安心していいんだよ！」

「いいわけあるか！って言うか何？！本気でぴーが入ると思ってんの？！仮に入ったとしてもなんか卑猥な表現使ってるようだろうが！」

「まぁ、それは置いといて」

「何故流す！」

「あと問題あるのは、……希我くん忘れてたんだよね？地の文でも取り扱わないほど」

「うぐっ！」

「……」

「……」

「……てんぱっ♪」

「のおおおおおおおおおおおおおおんんんんん！」

俺は、「そういやいをの存在忘れてたわーごめんごめ……ってオドレらなにしとんじゃあああああ！」とエアル達が帰ってくるまで、いをに地獄な時間（いをにとっては至福の時間）を味わいさせられたのである。

明日から忙しいのに、また余計な疲れを背負ってしまった俺だった。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「やっと風呂だぜ……」

死ぬほど疲れた俺は、さっさとサッパリして寝るべく、バスルームの扉を開ける。いろいろあったせいか汗でべたべたになったＴシャツやらジーンズやら上着やらパンツやらを脱ぎ、ドラム式洗濯機にダストシュート。がこんと音がしたのを確認した俺は、オマール海老みたいな名前の洗剤を適量注ぐ。ふたを閉めて、洗濯機の電源をオンにし、テキトーな操作をして洗濯機をまわす。

「ふぅ……ってやべぇ！お守り入れたまんまじゃん！」

俺は素っ裸なのも考えず即刻洗濯機を止め、中からジーンズを引っ張り出す。ポケットの中には、真っ白な生地に真っ白な刺繍が施されたお守りが、水浸しになって出てき……ん？

なんか、青いのが透けたような……。

俺は失礼を承知で紐で硬く結ばれた布袋を開ける。そこには、定番の硬い紙と共に、

青く光るサファイアがはめ込まれた指輪があった。

「……これ、高いモンなんじゃ……」

俺は宝石とかの知識はまったく無いが、この形、光、それぞれを考慮しただけでも、これが高いもだと感じさせられた。しかも指輪の裏部には「S．to．K」の文字。うん。高いだけじゃなさそうだ。

（これ、俺が持っててていいのかな……）

――――――――――仕方が無い。

返しに行くか。

……でもまずは風呂だ風呂！ひゃっほう！

ざぶーん。

橘家の浴室で、湯が勢い良く撥ねる中、空では怪しげな濃い黒の雲がゆっくりと近づいていた。

ゆっくり、ゆっくりと。分厚い停滞前線は、人々の明るさをみるみる奪っていく。

―5　宝石（後書き）

いまさらながら、ちょっとご意見を伺いたいのですが。

この小説に出てくる「前田　いを」。名前が文章だと、とっても読みにくいです。

なんとか読みやすい方法募集中です。

16　妹（前書き）

おふぅ…。なんか内容がカオス……。

16　妹

１１時過ぎ、この指輪を失くしたり壊したりしたらと思うと正直気が気じゃなかったので、鈴木家に向かう。夜遅くに言って平気なのかという質問をお持ちのそこのアナタ。大丈夫。彼だったら深夜アニメを見るために起きているはずです。

電柱の蛍光灯に群がる蛾共を華麗にスルーし、俺は十字路をサイドステップを利かせて曲がる。

鈴木さんの家までの一直線を歩く途中、近くの公園で猫と戯れている少女を見かけた。

それが鈴木さんの妹さんである事を思い出したのは、鈴木さんの家のインターホンを押す直前だった。急いで公園に戻る。彼女は変わらず、真っ黒な子猫と戯れていた。

「稜（りょう）ちゃん？こんな時間にいったい何してるの？」

ばっ、と振り向いた少女。よほど驚いたのだろう。彼女があやしてた子猫も、彼女の予想外の行動に驚いて、どこかへ行ってしまった。

「あ……」

稜ちゃんが逃げた猫の方へと手を伸ばすが、既に手遅れ。黒猫はどこかへ消えてしまった。

「ご、ごめん……驚かせちゃったな……君も猫も」

少し後悔した俺は、もっと静かに声をかければ良かったと思いながら謝った。…それはそれで驚かせそうだが。

そんな俺の気持ちを汲み取ったか、稜ちゃんは気にしてないと言わんばかりに首をぶんぶんと横に振ってくれた。うぅ、なんて良い娘なんだ。

ウチの赤茶髪ツンデレだったら、即行殴るか蹴るか握り潰すかどれかだもんなぁ……。

余談だが、奴の握力が５０を越えたと聞いた中２の頃は恐れ入った。その頃、冗談を言ってアイツを怒らせた俺の頭は、彼女のアイアンクローを喰らい頭蓋骨にヒビが入っていた、気がする。……思い出すだけでも背筋が凍る。泣いても喚いても許してくれないのだ。

稜ちゃんは、「どうしたの？こんな夜遅くに……」と俺に目で訴えて来た。無表情少女がじっとこっちを見ているのは、なかなかに良いモノだ……。……俺は変態か……。

と、とりあえず質問に答えよう。

「君の兄貴に借りたお守りの中にさ、指輪が入ってたから、返しに来ようと思って……」

「お守り？」

稜ちゃんは文字どおり目を丸くしてこっちを見た。その様子に少々不安を覚えながら、俺はジャージ（俺の寝巻）のポケットからお守りを取り戻し、彼女に見せる。

「ほら、これなんだけど……」

「……」

彼女は見つめる。今はもう、俺ではなく俺の指にひっかかっているこの布切れだけを見ている。信じれない、と言うように。目は口ほどに物をなんたらかんたらとは本当の話らしい。

「……で？」

「ん？」

「何で、お兄ちゃん、橘さんにお守り、渡した？」

「何で、か……」

何でだっけ……。確か俺に怪我されると困るとか言っていた気が……。

「えと、ちょっと長くなるけどいい？」

稜ちゃんは相変わらず無言で頷いた。

場所を公園の入り口からブランコの位置まで移動。3つあるうちの2つのイスに腰掛ける。俺の話を聞いた稜ちゃんは、やっぱり無表情だった。

「ボクシング対決……相手は誰？」

「え～と」

俺は気の弱そうなあの顔を思い出す。

「君と同じ一個下の、小松翔っていう奴」

「！」

稜ちゃんは、無表情を捨てた。驚いた彼女は、悲しいのか、嬉しいのか、怒っているのか、いろんな表情をごちゃ混ぜにしたような、反応し難い顔をした後、頭を下げた。俺、まずいことでも言ったかな……。

しばらくお互い黙っていると、重々しく、稜ちゃんは口を開いた。

「……橘さん。」

「ん？」

顔を上げた女の子は、決意に満ちた視線で俺を貫く。その目の力強さに、俺はぞくりとした。これを聞いたら鈴木さんは怒るかもしれないが、この子にこんな意思の強い表情ができるなんて、思いもしなかったからだ。

「これからあたしが話すこと、お兄ちゃんには、言わないで」

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

鈴木稜は、『マウス☆ピース』に来る常連である鈴木叶（きょう）の妹である。年は一つ下、東高に通う高校1年生だ。

鈴木さんが溺愛するのが分かるほど可愛らしい容姿をしており、同姓からもよくぎゅ～っと抱きしめられるそうだ。そのため、鈴木さんに箱入り娘として育てられてしまい、人見知りは激しくないものの、鈴木さん以外には決して甘える事は無いらしい（鈴木さん談）。

「お父さんと、お母さんが、離婚したのは、あたしが5歳の時」

ある日を境に、いがみ合っていた両親がとうとう離れることになって、稜ちゃんはほっとしたらしい。

しかし、今度は娘息子をどちらが引き取るかで問題になった。

「結局あたしとお兄ちゃんは、お父さんに引き取られた」

そうして三人で暮らすようになった鈴木家。しかし、またも苦難が兄弟に訪れる。離婚して数ヵ月後、父が兄弟を残して消えたのだ。

おそらく子供を育てるのに苛立ちを覚えたのだろう。親として最悪な行動だ。

2人きりになった鈴木家は、すぐに母の元へ行ったそうだ。しかし家の窓から覗くと知らない男が、リビングのソファーで自分達の母と共に、優しげに微笑んでいた。

「お母さんが、離婚した理由は……」

「そう、新しい旦那さんが、できたから」

ここは、もう、自分達の場所ではない。そう悟った自分と十離れた兄は、高校を中退。働き始めた。

始めのうちの生活は苦しかったが、兄の高い能力が評価され、数年後には一流企業の専務にまで上りつめたらしい。今は、会社をやめ、株で生活費を得ているらしい。だからいつも家にいるのか、と俺は納得した。

「その指輪、お守りは、お父さんの、お父さんの親から、代々受け継がれてきた物」

「へ、へ～」

……何だろ、複雑な心境だ。最低な父親のお守りが、勝利への道へと導くのか。俺だったら骨董品屋に売り飛ば……、何でもない。

「争いを、治めるのが、そのお守りの、定義。お父さんが、言ってた。それが、指輪の正体。でも、本題は、ここから」

「うん。聞くよ」

「…あたしには、双子の兄がいる」

……。

「へ？」

間の抜けた声が出た。あれ？俺こんな声高かったっけ？ヘリウムガスを吸った後のような声帯をいじられたような声が、夜の公園に響いた。

「ふ、双子？」

「うん。異父二卵性双生児の兄」

「……いふにらん……？何それ？」

「ようは、お父さんの違う双子」

そ、そんな事があるのか……。今日はいろんな事態に圧倒されまくりだ。

「お母さんは、その子が、今の旦那さんの息子だ、って言って、連れて行った。……双子であることには、変わりないのに」

「……」

「その子は、優秀だった。勉強も、運動も、友達との関わりも、全て、うまくいっていた。その子が中学生になった時、お母さんの旦那さんの影響で、彼はボクシングを始めた」

やっとピンと来た。この子が、何故こんな話をしたのか。鈴木さんが、何故俺に最強のお守りを託したのか。

「その子の名前は、」

「小松翔、か」

「…うん」

その名前を言葉にしたとき、俺は空に広がる雲を見ていた。分厚い雲。長い雨が降り続いたら、ロードワークは当分できないな、と思った。話をしながらも。

「それで、俺に、どうして欲しいんだって？」

「試合に、勝って」

言葉は、シンプルだった。それができるかどうかも、関係なしに。

「あいつの、何でもできるあいつの、負ける所が、見たい。あたし達2人を、暗い生活に追いやった、あいつの存在が、憎い。お兄ちゃんも、そう思ってるはずだから。あいつが負ければ、性格の悪いあの親達の、不満そうな起こった顔が、見られるはずだから。だから……！」

「ストップ」

俺は憤って立ち上がった彼女を、右手を彼女の顔の前に出して制す。表情は見えなかったが、彼女が、完全にこの世で最も汚い感情に飲み込まれているのには、気づけた。

「俺は、最初から勝負に勝つつもりだし、君の双子の兄貴を倒す。けど、君のお願いを理由に戦う訳にはいかない」

「……どうして？」

「純粋に、嫌なんだよ。その依頼。憎しみが悪いとは言わない。それは必ずしも悪ではない事を、俺は知ってる」

「なら……！」

「だけど」

再び言葉を遮る。どんなに彼女が不服でも、これだけは言わなければならない。

「その思いに対する行動を、人にやらせるのが、俺は気に入らない。それに、そんなことじゃ、何も変わらない。君だって、分かってるだろ？」

冷たく、言い放つ。稜ちゃんは、何も言わなかった。

「その感情をぶつけるのは、誰でもない、君……と、君の年齢の大きいほうの兄貴なはずだ。悪いけど、他人の憎悪を、発散させてあげるほど、俺はお人好しじゃないんだ」

俺は思わず握り締めてしまっていたお守りを睨む。そして、そのまま彼女にお守りを放り投げる。彼女は一瞬ぽかんと口をあけていたが、宙を舞う物に気づき、あわててそれを両手で掴む。

「それ、返すよ。兄貴に渡しておいて。……今までも、そのお守り握って、小松にイヤガラセしてきたのか？」

びくっ、と彼女は体を揺らす。どうやら、図星のようだ。

「お守りも可哀そうだな。『争いを治めるのがそのお守りの定義』、なんだろ？」

彼女は、俯いたまま、しゃがみこんだ。俺は振り返り、来た道を戻っていく。後ろから嗚咽と鼻を啜る音がしたが、無視して歩き続けた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「……さて」

俺は数分歩いたところで、振り返り、電柱に向かって話しかける。

「…出て来い、ナマイキツンデレ暴走少女」

「だれがよ！……ってあ！」

電柱の裏から出てきて、すっかり憤慨なさっているのは、エアルだった。

「いつからつけてた？」

「え～…っと～？」

何も知らないといったように明後日の方向を向くエアル。分かりやすい反応に、思わずため息が出る。

「……最初からか」

「……うん。そうよ。飲み物買いに自販機に向かっていたら偶然あんたを見かけて、こんな真夜中に、珍しくデスクワークしないで何してるんだろ、と思ったから……って、別に、あんたが気になって付いてきたわけじゃないのよ？！ただ、誰か女の家に転がり込んで、破廉恥なことでもして警察に捕まったら、あたしが学校に行きにくくなる……と思っただけなんだから！あんたがいないと困るって意味じゃなくて、からかわれたりしたら嫌だな、って言う自然な行動なんだから！」

「お、落ち着け。分かった分かった。お前も自分で言っていたが、真夜中だから。一応」

「あ……」

恥ずかしくなったのか、暗くても分かるほど顔を真っ赤にして俯くエアル。うん。可愛い。口にしたら殴られそうだから、言わないけど。

「ほら、もう遅いし、帰るぞ」

手を引っ張って、俺は歩き出す。後ろから「は、離せバカ！」とまたも大声を上げている奴がいたが、ご近所さんが目覚める前にさっさと逃げるとする。

「それにしてもさ」

「あ？」

あと信号を三つ越えれば自宅という道のりにて、信号赤。電柱に体を預けながらエアルは、まだ若干顔を赤くさせたまま、不満を漏らしていた。

「さっきの話だけど。あんな言い方、無かったんじゃない？あれじゃ女の子なら誰だって泣くわよ？」

「…お前もか？」

「いや、あたしは例外。そんな事言ってきたら、殴り飛ばす」

「それもそうか」

俺は苦笑する。しかし、彼女はさらに声のトーンを下げて独り言のように呟き続けてきた。

「だけど、人間みんな心が強いわけじゃない。それは、あんたが一番知ってるでしょ？……心が、脆かった時代が、あったでしょ？」

「……そうだな。お前の言う通りかもしれない」

俺は今も泣いてるかもしれない稜ちゃんのことを頭に浮かべる。罪悪感が、沸かないわけでもない。

「半分は、八つ当たりだった。昔の自分を見ているようでさ。口がブレーキを忘れてたみたいに、思ったこと、どんどん口にしていた気がする」

俺は、自分の最も暗い日々を思い出す。真っ暗で、出口なんてな

いと考えていた頃の記憶。自分が間違っていると気づけたのは、こいつらのおかげだ。

……だが。

「それでも、間違っているものは間違っているんだ。いくら人を頼りたくても、自分で成し遂げなきゃいけない事は、どんなに辛くても一人でやらなきゃいけない」

「そうね。昔から、あのときから、あたし達はそう決めたわ」

過去を遡るように、エアルは空を見上げる。俺も同じように、空を見上げる。未だ、空は雲で覆われている。

「でもさ、手伝いくらいはしていいんじゃない？」

「手伝い？」

「そ。手伝い。アンタは、できない事があったら、友達に手伝ってもらうでしょ？」

俺は黙っていた。エアルは続ける。

「それと同じ。だから、稜ちゃんも、本当は手伝って欲しいだけかもよ？」

もう一度、稜ちゃんを頭の中に浮かべる。彼女は、どうしようもない気持ちに、やるせない感情に、圧迫されそうになって、それであんな突飛なことを俺に頼んだのかもしれない。

「そうか、手伝って欲しい、か……」

「うん」

「……エアル」

「ん？」

俺は彼女を見る。彼女も、俺を見る。感謝の言葉はいとも簡単に出てきた。

「ありがとな」

「……うん」

俺は夜空をもう一度見上げた。少しだけ、晴れ間が見えた。信号は青になった。

16　妹（後書き）

どうも、今日プール清掃で上半身裸になって暴れていた友達をこれでもかと言うくらい嘲笑っていた作者です。

なお、彼は満面の笑みでした。

―7　特別授業（前書き）

あ！暑いなコンチクショー！

と、久々に我が家に来た友達と絶賛発叫中だった作者は、じめじめするこの季節が大っっっ

7　特別授業

一夜明けて、東の空が明るくなるが、今日も昨日に引き続き雲が空を覆っているため、日の出を見ることはできない。それでも昨日の夜よりは、幾分か薄い乱層雲になったようだ。

雨も降っていないようなので、俺は飲みかけのコーヒーを店のテーブルに放置し、マイパジャマであるジャージのまま外に出る。

屈伸等のストレッチで十分に体をほぐし、首を鳴らしてこれから足で踏み越えて行くコンクリの道を真っ直ぐ見据える。今日のノルマは、１０?くらいでいいか。

さぁ、孤独な一人ジョギング早朝の部へ、れっつごー。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

家に帰ると、店の入り口の前に、およそ5時間ぶりに会う赤茶髪の幼馴染がいた。

近づきながら様子を見ていると、顔を真っ赤にして、見られたくない物を隠すように両手を背中に隠している。まぁ、布がはみ出してるし、自販機でしょっちゅう見かけるあの青い偉大なペットボトルのラベルが見えているため、答えは一目瞭然なのである。

……ここで無視したら面白いかも……。いつものいろいろ言われてるし……。

脳内小アクマが、俺に魅力的……ご、ごほん。失礼な提案を囁いてきた。どんだけいぢわるなんだ、俺の小アクマ。

も、もちろん、俺は女性に対して無礼千万なことをするつもりは毛頭も無い。ましてや、（まだ予測の域に過ぎないが）自分のために朝早くからいろいろ尽くしてくれただろう女の子に、小学生レベルのイヤガラセなんて、俺がするはずが無い……。ほら、俺の頭の中でも、アクマを倒そうとちっこい可愛らしい天使が……。

そして通り過ぎる際。

「……お……、おはよ」

「……」

……。

脳内では、アクマが天使の顎にフライングキックを見事ぶちかましていた。

……無視しちゃった。

やっべー。やっちゃった事はもうしょうがない、後で謝るとして。後ろから感じるツンデレ少女特有の気配は何だろう？彼女がわなわな震えている気がする。

「……う」

あぁ、完全に逆鱗に触れてしまったようだ。もう怖くて後ろを向

けない。先に言っておくが、彼女の戦闘能力は、怒りに身を任せればサ〇ヤ人のそれを遥かに凌駕するだろう。なんて事をしてしまったんだ。

人間、ほんの好奇心で行動しちゃいけないな。これからは自粛することを心に決め、とりあえず背中に力を入れて、ガードを固める。これで、大きな怪我はしないはずだ。

「う、う……！」

く、くるぞ。俺は覚悟を決める。今回に関しては、完全に自分が悪いんだ。学校に遅刻しないような時間までに、彼女の攻撃が治まるのを願おう……。

「う・うあああああああああああああああああああああんんんんんん！」

……って泣いた？！

俺は高速回れ右、後ろにいるはずの口うるさくてたまらない同級生、甘味エアルを見る。確かに、ぼたぼたと涙を落として大号泣していた。

俺が唖然としていると、その場にへたり込んで道路にうずくまった。丸くなっている背中が、嗚咽で何度も上下する。

「どおおおおして、むしするのおおおおおおおおおおお？！あぁあああああああああああああんんん！」

わ、忘れていた……。こいつはツンデレで、しょっちゅう悪口を

言うし素直じゃないが、無視だけは心から嫌い、相手がどんなに謝ってもなかなか泣き止まない変なヤツだった……。その証拠に、俺が土下座して謝っても、ひたすら奇声を発するだけ。

その馬鹿でかい泣き声に、商店街の皆様もわらわらと集まってきやがった。俺達の様子を見た彼らは、「あ、またエアルちゃん泣かしたな希我！」「この落とし前、どうつけてくれるんだ！」「今度無償でウチでバイトして貰うわよ！」と思い思いに罵詈雑言を俺に浴びせてくれやがる。

うーん、と俺はすっかり小さくなってしまった少女を宥めながら唸る。

本当に今回は俺が悪なのは分かっているつもりなのだが、何故みんな俺が悪いと決め付ける？そんなに俺、信用ないんか。店長を辞めたほうが絶対いいと、確信してしまいそうになるではないか。

エアルがなんとか泣き止んだ後、何でか本当に全く理解できないが、俺は商店街の皆さん全員に頭を下げまくった。うう。首痛い……。

そして学校が始まる１０分前、エアルが車で送られていったのに、俺は８０キロのウェイトを体中に装着させられ、「そのカッコでガッコ行け。ずっと見ててやるから」と脅された。

俺が汗だくになって学校に着くのは、始業のチャイムが鳴り響いてから３０分後のことだった。

うん。悪いことをすると倍どころか、百倍になって返ってくるんだね、俺達の街では。いい勉強になったよ。

体に傷は一つも付かなかったが、心にとてつもなく大きい傷を負ってしまった俺は、生活指導の先生に怒られながら、深く深く思うのだった。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「って、訳だ」

「そりゃあ……ご愁傷様だね……」

学校の体育館。クラスの女子と男子とイケメン体育講師が体育着を着て入り混じって話す中、クラスメイトの秋山は、どう反応したらいいか分からないと言った、微妙な顔をしてらっしゃった。そりゃそうだ。俺だってそんな話聞かされたら、何をしたらいいか分からず、癖である髪の毛いじりを始めてしまうだろう。

隅で座っているエアルは、未だどよよーんとしたオーラを出したまま俯いている。今日のこの授業は見学にさせて貰うらしい。どんだけショックだったんだよ。まぁ、何度も言うが俺が悪かったのだが。

午前中の授業は終わり、今は五時限目の体育。今日は火曜日なので、我が高校毎週恒例の特別内容だ。詳しいことは、これから体で証明するので、ここでは省く事にしよう。

「……気になってたんだけど、田中はどうしたの？今日一日中見なかったけど」

「さぁ？どうせサボってるんだろ？気にしなくて良くね？」

「それもそうだね」

我らが3馬鹿トリオの一角は、俺が遅れてクラスに入ったときからいなかった。まぁ、「バンジーだ！」とか言って平気で屋上からダイブするような変態だから、心配する必要は無い……もとい、全く無いだろう。

そうこうしているうちに、イケメン講師が点呼をとりだしていた。

「さ、行こうよ」

「うぃー」

やる気なく、俺は腰を上げる。めんどくさいが、やるからには本気を出さなければ。

「んじゃ、いつもどおり上のランクから2人ずつペアになれー」

はーい、と元気な声が上がる。しかしまぁ、この授業になると、みんな異様なテンションになる。何故だ、何故そんなに。

戦闘が好きなんだ、お前達は。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

この水市立水市東高校と、西高校では、ある特別なカリキュラムが設置されている。

その名を、『ケンカバトル』。

いったい誰なんでしょうねぇ、こんなひどい名前をつけて、さらには採用してしまったのは。まんまじゃねぇか。一言聞いただけで何をするのかが分かるのが唯一の長所だな。

ルールはいたってシンプル。２０分以内に、自分の部活の道具を使うか、もしくは装備なしで、相手が降伏するか気絶するまでケンカする。ちなみに道具は金属だけは無し。行動範囲はそのつど決定。服装自由。

そう、要はケンカなのである。

もちろん、ＰＴＡの批判はすごい。地区会を開く度にこの授業の話題でもちきりになるほど。

校長が「ケンカをすることで世の中の厳しさを知り、非行に走らなくなるのだ！」と言って生徒手帳に書き加えられたこのシステム。だが、俺はこのシステム、割と利にかなっていると大変遺憾ながら思っている。

まず、こうやって体をぶつけ合うことは決して悪いことではない。部活やスポーツと似た一生懸命やって成果を出せたときの達成感は、普通の授業なら味わえないだろう。

次に、人間はケンカが潜在的に大好きであると俺は考えている。

いや、この場合はケンカという表現は間違っているな。強いて言うなら戦闘。少し話を変えるが、どんな人間も、子供の頃はジ〇ンプなどのバトル漫画で男女問わず誰しも心をときめかせ、「自分もこんな主人公になってみたい」と思っていたはずだ。そうやって、出ないと分かっていてもかめ〇め波を夢中になって練習し、ゴムゴム〇ピストルに日が暮れるまで挑戦した俺達。そんな心をついこの前まで持っていたイマドキの高校生が、「ランキング」や「バトル」等のワードでワクワクしないわけが無い。

俺はそんな少年心を小さいときに置いてきてしまったので、今ではあまりそういう気持ちは湧かないが、理解はできる。事実、俺だって当時はそういうことが大好きだったのだから。

そんなわけで、最初はイヤイヤ言っていたあそこにいるか弱そうな女の子も、今では嬉々としてテニスラケットをサッカー部の男子に振り上げようとしている。そこにあるは、楽しい物を楽しいと思う純粋な表情だ。

危険が無いわけではもちろん無いし、社会に出て役に立つのかと反感を買ったら俺達は何も言えないが、こうしてみんなが何かに熱中するのはとてもいいことだと思う。こんなめちゃくちゃなシステムが無ければ、こんな光景は今の腐敗した日本では見られないだろう。

この、腐った国では。

「橘、何ボーっとしてんだ？俺達も始めるぞ」

剣道部の今井が、早く戦いたくてしょうがないと言ったように竹刀を携えている。俺達以外のペアはとっくに準備を終えてしまった

らしい。好きだなほんとお前ら。

周りの空気に流されるように俺も今井と向かい合うと、イケメン講師は大声で叫んだ。

「じゃあ、今日も早速始めるぞ、いいな？！」

『はーい！』

「そんじゃあ……、レディー……！」

『ケンカバトル！！！！！』

……。

どうでもいいが、去年の春、この学校に入学してこの授業を受けてから、俺は一度もこのアホみたいな合言葉は叫んでいない。

7　特別授業（後書き）

ポケモンの新作が待ち遠しくてたまらなく、部屋の床をごろごろ這いずりながら悶えている作者。

それにしても、最初の一体であるミジュマルのそばかすは残念だと思いますｗｗｗｗ

18　番付（前書き）

バトルを組み込んでみました。

戦闘描写は、周りの事についての文章も吟味してテンポ良く進めないといけないのが難しいですよね。

一8　番付

試合が始まり5分以上過ぎたあたりだろうか。俺の軽快なフットワークに、なかなか竹がはぜる音がしないまま空振りしてしまう竹刀に苛立ったのか、今井が両手で竹刀を持つのを止めて、片手で柄を握りしめた。竹刀を居合いの形までゆっくりとスライドさせ、目を瞑る。

何をしかける……？

無闇に近づいても反撃を喰らうだけなので、俺は体を今井に向けたままバックステップ。安全な位置まで下がる。

およそ１０ｍの距離。近づかなければ危険な居合い斬りなら、これほど距離があれば問題ないはず……。もし居合い以外の攻撃をしてきたとしても対応できるだろう。

今井はなおも目を瞑り続け、さらに深呼吸ひとつ。

そして、今井の目が再び開かれたと思った時には。

彼の顔が、目の前にあった。

「っつ？！」

俺は反射的かつ直感的に、体を逸らすだけでは意味が無いと判断

し、体を後ろに倒す。体育館のバスケットゴール下辺りの床に両手をつけ、ブリッジの体勢を作る。

天井を見上げる姿勢の俺の体の上では、逆光で真っ黒に見える棒状の物が、すごい勢いで通過していた。棒の速度が落ちたので首を向けてみると、やはりそれは彼の竹刀だった。

……おいおい。間近で見て分かったが、あれ、いなせるとか、弾けるとかのレベルじゃないスピードだったぞ……。当たったら確実に病院送りじゃねぇか……。

……ん？

良く見ると、彼の剣道具である胴の部分が完全にがら空きだ。竹刀は右腕側に落ち、何も持っていない左腕はさっき彼の攻撃のカウンター時に拳を当てたので麻痺しているようだ。……チャンス。

俺は腕に力を溜めて、横に跳ぶ。跳ね起きの応用で、今井にドロップキックをかます。

当たれ……当たれ……！

「当たった！」

「ぐふっ……！」

当然のように吹っ飛んでいく今井。手から離れていく竹刀。二つの物体が床につくのはほぼ同時だった。オラオラ、これからもっとぼっこぼこにして……。

グキッ！

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああ！」

右の足首を捻った。胴部の頑丈な守りに足をやっちまったらしい。つか、当たり前だ！こっちは真っ黒な鉄だかなんだかを素足（動きやすくするため）で蹴っ飛ばしてんだから！そりゃ足の一つくらい捻るわ！むしろ片足だけって言うのが奇跡だわ！アホー！

と、心の内面で叫んでみるも、何しろ若干赤く腫れてきた足首が痛すぎて言葉にならない。足を抱えたまま声を振り絞ってみるも、

「……その防具は、無し、だろ……」

負け惜しみのセリフしか出てこない。向こうでは、その言葉に反応して今井がムクリと立ち上がる気配。ダメージはあったらしく、のろのろとした様子で、落とした自分の得物を取りに行く。

右手で拾い、竹刀に問題がないか確認しながら、彼は笑った。

「その分、スピードが無くなる……。プラマイゼロだよ……」

「……あの一瞬で近づくやつは、何だったんだよ……。思わず口づけしてしまいそうだったぜ」

お互いに、息を頻繁に吐きながら喋る。フットワークの鍵である足をやられた俺としてはさっきの両足蹴りは失敗だった気がするが、ヤツには今の吹っ飛んだ衝撃と、先の左手の麻痺が残っている。受けた痛みは同じくらいだろう。その証拠に、今井は右手で竹刀を持ちながら自分の左腕を押さえている。

「……アレは、お前が瞬きをした瞬間に床を蹴り飛ばしただけさ……」

「……サラリととんでもない事言いのけやがったな、こいつ……よっと」

俺も立ち上がる。普通に歩く分には問題ないだろうが、大きな動きは避けたほうがいい。つまり、これからはあの剣戟を身体に浴びながら殴りに行くのを覚悟しなければならない。……死ぬかな、俺。

「さて、あと十分か……。逃げきれそうも無いし、早々にしとめなきゃだなぁ……」

「……それにしてもお前、意外にいつもこの授業本気だよな。こういう中二臭いのは、嫌いって言ってなかったか？」

「…特典目当てだよ、俺の狙いは。校内ランキング2位さん♪」

「ふ、現金なヤツめ……ハッ！」

先ほどと同じように居合いの姿勢で近づいてくる今井。今度は瞼を落とすことなく、避けることもなく、臨戦体勢で迎え撃つ。

全ては、賞品……じゃなかった、勝利のため。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

「あー、あんなに腫れてるよ……大丈夫かなぁ、希我」

確実に面を狙った攻撃を、希我がギリギリの所で避ける。その様子を見ているのはこのボク、秋山旬です。

他のみんなほど戦闘狂じゃないボクは、野球部のボウズ君の投球を鳩尾に喰らい、サクッと降参してきた。今は、体育座りしていたエアルちゃんを誘って、希我の試合を見ている。

しかし、相変わらず危険な闘い方だ。試合に夢中になると反復横とび78回の記録を持つ足を全く生かさずに、ただ相手を殴るマシーンになるのが彼の本当の意味で悪い癖だ。週末にボクシングの試合が控えている人間とはとても思えない。あれでは体を傷つけているだけじゃないか。

「ねぇエアルちゃん、今度希我に言ってやってよ。いつかマジで大怪我するって……」

「どよよ～ん」

「……」

話しかけてみるも、希我から聞いた朝の事件のことを完全に引きずっているらしい。そ、そんなにショックなんだ……。そして、自分が他人を無視するのはいいんだ……。

ボクはもっとよく希我の試合を観察することにした。所属は卓球部のボクだが、一応ボクシングの経験はあるので何かしらアドバイスはできるはずだ。そうぼんやりと思っていると、隣で誰かが希我の試合を見ているのに気がついた。

「あ～あ。希我くんたら、あんなに怪我しちゃって……。後でこれでもかって言うくらいボディータッチしながら手当てして上げなきゃ……。うふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

「その壊れた笑い方とボディータッチはいいとして、よろしく頼むよいをちゃ……いをちゃん？！！！」

ふと振り向くと灰髪小学生サイズ中学生の前田いをが、東中のセーラー服を着て腕を組んだ立っていた。彼女はこちらを見て笑うと、急に顔を引き締め、額の斜め３０ｃｍほどずらしたところに右手を掲示。警察とかでよく見かける、敬礼の姿勢だ。

「こんにちわであります、秋山せんぱい♪」

「何で……はもう分かりきったことだけど、」

この子が希我のことを大好きで大好きで大好きでしょうがないのは、この学校、いやこの街中が知っている事実だ。ちなみに、希我が彼女を相手にしていないため、ひそかに結成された「いをちゃんファンクラブ」の皆様が、希我に殺意を持っている。こないだもファンクラブの３０人が廊下で希我に奇襲を掛けていた。まぁ当然のように屋上から足を紐で吊るされていたが。

「……いつからいたの……？」

「ん～と～。せんぱいがエアルを誘ってここに座りに行ったあたりですかねー」

「ほぼ最初からじゃん！」

エアルちゃんも侮れないが、この子もなかなか（というか相当）に侮れない。希我は、言葉を選ばなければこんなにおてんばな女の子を雇っているのか、そう再確認した。

「ずっと気になってたんですけど……」

五時間目の授業が自習になったので堂々と学校から抜け出してきたらしいいをちゃんが希我の応援をしながら、ある質問をしてきた。

「希我くん、何であんなに頑張っているんですか？希我くんに聞いても、ウチの高校に来れば分かる、って教えてくれなくて……。他のみんなに聞いても、同じように首を横に振るだけで……」

「それは……」

うーん。教えていいものか……。

悩んでいると、エアルちゃんが助け舟を出してくれた。

「いいわよ、教えても。別にそこまでして隠すほどじゃないし」

両足の膝小僧の間に頭を埋めながらの発言。奇怪過ぎるが、ツッコんでいるといをちゃんが置いてけぼりにされちゃうので、そちらの方を優先させる事にする。

「じゃあ、話すよ。……先に言っておくけど、希我は、いをちゃんに悪気があってこの話題を避けてた訳じゃない事を承知していてね」

「わかりました」

「結論から言うと、生徒会長が悪いんだけど……」

春、生徒会長が掲げた公約には、もう一つめちゃくちゃな内容の物があった。それは、この特別授業、『ケンカバトル』に関してのものだった。

『2つ目は、『ケンカバトル』をランキング制にします！』

なんでも本人曰く、ただ闘うだけではやる気の無い生徒（例えば俺）が出てきてしまうそうな。みんなを本気にさせるためにはそれぞれの熱き闘争心が必要、だからランキング制にしてまずクラスで競争する。そして期末試験の3日後に、クラス内での1位同士が総当たりで闘う。この時、学年別ではなく校内の計18のクラスのトップが闘う。校内1位を認められた生徒には賞品が与えられる。なお、最初のランキングは生徒会が能力値を見て決める。

ここまでは素晴らしい提案だった。あの頭のネジがはずれて脳ミソがはみ出てるほど頭が悪いと評判の会長にしては、完璧な公約だったと言えよう。

「問題だったのは、その……」

ばしーーーーーん！

唐突に、竹刀のいい音が、体育館を駆け巡った。一瞬の静寂。その静かな空間を切り裂いたのは、いをちゃんの……、

「希我くん！！！！！！！！」

悲痛な、叫び声だった。

8　番付（後書き）

いをちゃんはストーカーwww

―9　結果（前書き）

超短め。

新作のプロット作りで忙しかったのです……。

ごめんなさい、言い訳です。

…でも、長すぎも読むのが大変になっちゃうよね！！（開き直り）

19　結果

「希我くん！」

いをちゃんが心配そうに希我に走り寄る。ボクはといえば、その様子に唖然とするだけだった。

彼の腕は血に染まり、だらんと垂れ下がっている。相打ちに終わったらしく、竹刀は粉々になって床に散らばっている。今井君も、自分の様子に震えているようだ。

「希我くんっ！希我くんっっっ！」

何度いをちゃんが呼んでも、希我は返事をしない。生ける屍のようだ。言うなればゾンビか。今の彼は、人間と認められないほどのひどい状況だと言うことだ。

「……勝負、アリだな」

今まで試合をずっと見ていた体育講師は、神妙な面持ちで告げる。いをちゃんは、泣きそうな顔で彼に訴える。

「せんせい！希我くんの治療を……！」

「前田か。また潜り込んできたな……、まぁ、それは大目に見てやろう。ちょっと待っていてくれ。後３０秒もかからない」

「でも……いえ、わかりました」

いをちゃんが引き下がり、イケメン講師は立っている生徒の手を掴み、高く突き出す。

「勝者、橘希我！」

希我は血塗られた右手を上げながら、無感情な顔で天井を見上げ。

今井君は粉砕された自分の相棒を視界に捉えながら、「ちくしょう……」と呟いた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「じゃぁ、見ていなかった奴のために、何が起こったか説明してやるぞー。しっかり聞いとけー。

試合中足を挫いてしまった橘は、持ち前のフットワークを生かせず、今井の怪我の痛みによる寸分の狂いのおかげだが、竹刀をすれすれのところで躱していたな。

試合終了2分前、今井が勝負をしかけた。試合中盤で放った移動式居合い斬りを再び発動したんだ。それも、かわす余地の無い、超至近距離でだ。竹刀は完璧に橘を捉えていたな。

絶対的不利な状況。橘が一瞬の煌めきでとった行動……え？「長年の経験によって感じとった最良の選択」って言え？なんだっていいだろ、少し黙ってろ包帯男が。

えー、どこまで話したっけ…。そうだ、橘の反撃方法だったな。

躱せない剣。それを橘は

竹刀ごと今井を殴り飛ばしたんだ。

おかげで竹刀は粉砕、腹に竹刀と共に拳を叩き込まれた今井はあばらを骨折。橘は右手を切りながらも大きな負傷は足と竹刀を殴った右手の捻挫だけ……。

はい、今回の試合で橘がバケモノだと思った人挙手～。うん、全員綺麗な挙手だなー。確かになー。人間技どころか怪物技以上のゴリ押しだもんなー。何で骨折しないんだろうなー。竹でぶん殴られてるのになー。

そんなバケモノ右腕包帯ぐるぐる男のランクはクラスで1位、校内で2位になって、今井はワンランク降格だ。

じゃあ今日はここまでー。次に備えて鍛練に励めよー」

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

「失礼します」

放課後の廊下、窓から見える見晴らしもいい学校の5階。俺は負傷した右腕をかばいながら左手の指の第二関節でとある扉に上品にノックする。こうしないと、この重たい鋼鉄の扉についてる自動認証システムによって床に穴が開いてここ5階から地下1階まで落とされる……らしい。いや、嘘か真かは定かではないが、この部屋の主ならやりかねない。

扉の向こうから、「はぁ～い、どうぞ～」と間の抜けた声と共に、鉄戸のロックの解除されたと思しき電子音が聞こえる。俺はノブに

左手をかけ、少々力を入れて扉を開ける。心地よい冷気が、じめじめとした水無月の空気を吹き飛ばしてくれる。

はぁ～天国……。

じゃないじゃない！俺はちゃんと目的があって来たんだからな！今に見てろよ！

会長！

「？どうしたの？早く入りなよ。むしろ早くドア閉めてよ。せっかくの快適空間が台無しじゃない」

そういって急かす生徒会長。俺は言いなりになった訳では無いが、確かに日本の貴重な電力がただただ浪費されていくのはいたたまれないので、右手で戸を閉め……ようとして、包帯ぐるぐるになってることに気づく。捻挫とはいえ、今日一日くらいは右手が使えないのか……いろいろ不自由しそうだ。

左手でガチャリと音が響くまで戸を閉めると、会長が「大変そうね」とクスッといやらしい笑みを浮かべた。これも、俺が会長を苦手とする由縁の一つだ。

人を、常に見下したような、エリートがする笑み。

俺は顔を逸らしたいのを必死に堪え、話題を提示する。

「今日は、週末の親善試合について、お願いがあって来ました」

「そう。どんなお願い？」

会長は未だ表情を変えず、興味深そうに身を乗り出しながら聞いてきた。…いちいち仕草がムカつく。

「あ、立ち話も難だから、クーラーの前の席にでも座って？」

……。

よ、読めるのか、人の心が……。くそ、これは誘導だ……。自分が有利になる環境を作るための悪魔の誘いなんだ……！なんて会長だ！馬鹿のクセに！

ただの善意である可能性など考えない俺は、再びクーラーの前の椅子、及び机を見る。

ふ、ふん！この俺様がそんな綿菓子のようにふわふわしていて甘過ぎるトラップに引っ掛かるとでも……！

「ふわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

……。

クーラー最高！

不覚にも、会長のペースに呑まれてしまった。だけど悪い気はしないぜ！

―9　結果（後書き）

化け物じみた事をしてしまった希我君。

だけど、この世界じゃあんなのゴロゴロいますから。

……どんな世界だｗｗｗ

―１０　交渉（前書き）

な、なんとか今日中に投稿完了……。

うぅ、頭痛がああああああああああああああ！

―10　交渉

前回までのあらすじ。

週末のボクシングの親善試合に関する事で生徒会長に要求をしに来た俺こと橘希我。

決してクーラーの素晴らしさに身も心も虜にされてなどいません。もしそんな事があっても「という夢を見たのさ！」って感じで編集してくれてあるはずです……。

「で、何しに来たんだっけ、希我君？」

「ほぇ……」

「あらら……」

嘘です。今もなお冷房をガンガン顔やら手やらに浴びています。駄目だ、俺、ここから動きたくない……。

完全に堕落した俺。このままじゃいけないなー…うーむ、喉が渇いたな。だれかー、俺の好物メロンソーダフロートを持って来てくれー……。

「はいはーい♪ただいまお持ち致しましたー♪」

「お、気がきくな。サンキュサンキュ……。……何してやがる、いを」

「ん？メイドさんごっこ♪」

「……」

本日2度目のご登場のいをだった。格好は定番な赤と青のラインのセーラー服。試合の時も同じ格好だった……って事はコイツ学校ずっとサボってんのか？！

「おまっ、学校ちゃんと1回戻ったか？！つかサボっちゃダメだ！」

「う、ごめんなさい……。でも学校にはちゃんと帰ったよ。希我くんと一緒に帰ろうと思って校門まで来たら、下校してた秋山せんぱいがここにいるって教えてくれたの。なんかトラップがあるって聞いたから、天井裏を通って」

上を指すいを。見上げれば、確かにぽっかり穴が空いていた。はぁ、ツッコむのめんどくさ。

「で、蒸し暑いからついでにそこのロ〇ソンでメロンソーダとバニラバーを買って来たんだけど……迷惑だったみたいだね」

少し拗ねたようにもじもじしながら弁解し、さらには悲しみで顔を歪めるいを。な、何だ？この罪悪感。

……あぁ思い出した。このロリ少女の特技は、『涙目になると相手に後悔の念を押し付けさせる』、だったな。はっはっは。すっかり忘れてたぜ。おかげでなんか俺が悪い事したみたいじゃんか。

ほら、会長も「希我君　サ　イ　ア　ク」と唇だけ動かしていた。

あ、あーあ、終には泣き出しちゃったよこの娘。こんな事をする

と、

『希我ちゃんを泣かしたなぁああああああああああああああああああ』

『いをちゃんファンクラブ』の皆様が黙っちゃいないのだった。

……しかし今日は運が悪かったな、お前達。

なにせここは。

『たのもー……！』

パカッ！

『え……つぎゃああああああああああああああああああぁぁぁぁぁ……………！』

セキュリティ万全の金持ち生徒会長の生徒会室なんだぜ？

※　※　※　※　※　※　※　※　※

俺はいをの頭を十分に撫でて彼女をどうにか泣き止ませた。…さっきの騒動のおかげで、クーラーに酔いしれていた過去の自分とようやく決別できた。ありがとな、物凄いスピードで1階に落とされた馬鹿共。

俺は会長に向き直る。彼女は暇そうに爪の手入れをしていた。…

やっぱ、ウザいなぁ。

俺はこの豪華絢爛な部屋————正確には、モナリザの絵が飾ってあったり、シャンデリアがあったりする三十畳はあるだろう部屋————を侮蔑するように睨んだ後、あえて会長の喉に焦点をあわせながら、話し始める。そろそろ、気を引き締めなきゃな……。

「結構話逸れましたけど……お願いがあります」

「あら、私てっきりクーラーの風を浴びさせて下さいって内容のお願いだと思ってたけど、違うのね」

「うっ。」

と思ったら再び会長のペースへ。く、くそ。また刺みたいに鋭い指摘を……。この会長、割とSか？

しかしここでエアコンの事に心を奪われると話がスムーズに進まないので、さっさと要件だけ言おう。

「えと、お願いと言うのは、今度の試合で勝ったら……」

言うぞ、言うぞ？！この会話をきっかけに東高と西高の陰湿な闘いなんて、俺が根こそぎ一掃してやるぜ？！ＰＴＡの話から、親御さんの力で生徒を叩き直すように会長をうまく誘導してやるぜ？！おおおおおおおおおおおおおおおおお…………！

あ、クーラー涼しそう。

「ク、クーラーを全教室並びに全部室に設置して下さい」

「え」

「……あ」

…………。

何言ってやがる俺の虫野郎おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお？！

馬鹿か？！俺は？！何でそこでクーラー？！意味不明もほどほどにだぞ？！分かってんのか？！俺のこの脳内発言も意味不明なの、分かってんのか？！

「く、クーラー？な、何で？あんま希我君に利益無いんじゃ？」

ほら！会長にも変な目で見られた！おいおいおいおい！そりゃ無いだろう？！後ろのいをも、完全に俺の行動に理解しかねておられるでありんしゃいでございます！そして遂には丁寧語なんだか尊敬語なんだか謙譲語なんだか、いやもはや全く新しい言葉の種類を作ったぞ、俺の脳内発言！

「いや、今のは、え～と……」

俺は今の出来事というか発言を無かったことにするため迅速に対応するが、しかし相手はどんな状況でもあの馬鹿会長。どんどん話を進めやがる。

「うーん、ま、暑いのも嫌だろうしね……」

机の引き出しから領収書を取り出し、サラサラと自分の名前と適当な金額を書き込み判子を押すと、それを俺に渡した。

「うん。報酬とか、ぶっちゃけめんどくさい。要望なら、理由があれば、ちゃんと聞いてあげるよ？」

やたら真面目な事をぬかしやがる生徒会長。なんだそれ？！めちゃめちゃ正論じゃねぇか！なんか、俺がアホの子みたいじゃんか！

「それを校長に渡せば、多分すぐにでも工事が始まって、明日には全ての部屋にクーラー完備されているはずだよ。……っと、もうこんな時間。わたし、これから家でパーティーがあるから、部屋の電気消してから帰ってねー。鍵はオートロックだから、締めるだけでいいよー」

……。

しくじった。

ふと視線を感じて斜め横を見ると、隣でいをが、不思議な物を見る目で俺を見ていた。口をぽかんと可愛く開けている。いつもの俺なら頭でも撫でて「さぁ、帰るぞ」とか言うのだが……。

「希我くん、何がしたかったの？」

……。

一遍、地獄を見てきたほうがいいな、俺。

さよなら現世。

涙が、つつーっと頬を垂れて、床に落ちた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「ふーん。お嬢様だったんだ、東高の生徒会長」

生徒会室の鍵がしっかりかかった事を確認した俺達は、帰路をのんびり歩いていた。

「うん……まぁ、そうなりますね……ひぐ、えぐ」

「ほらほら泣かない泣かない……、うふ、この希我くん、ヤバ萌え……！！」

そう、公立水市東高等学校の生徒会長は、物凄い金持ち一家の娘なのだ。

その横暴さ、無理やりさは親譲りの物との事。だから、警察を始めとする日本の機関はだいたいこの人達の物と言っても大袈裟ではない。実際、昨日の公民館前での騒ぎだって、会長が絡んでると分かった時点で踵を返して逃げたらしい。情けない話だがそれは、会長達の権限の強さを裏付けている。

だから、その、あの、ク、クーラーの件も普通だったらあり得ない話だが、あの会長はいとも簡単にその場の常識をねじ曲げ、歪め、自分のやりたいようにする。

俺があの会長を嫌うのは、そんな人知を越えたやり方を、なんの躊躇いも無しに使うからだ。権力に任せた力の酷使は、いずれ無関係な人間の幸せまで奪ってしまう……。

あ、ここまでの俺の独り語りはこの間読んだ本の受け売りなので、あしからず。

「うーん、でも、ＰＴＡの力を使うのは、良かったんだけどなー。でも、どうしてあたし達に話さなかったの？」

いをがコクッと首を傾げながら聞いてきた。

「……う？あー…。作戦のことか……。別に話しても良かったんだけどなー、俺が試合に勝って、開場の声援がＭＡＸになったら、最低人数でＰＴＡの声を書き記したビラをそこにいる人に配りまくる作戦でさ、あまり『マウス☆ピース』の人間がいなくても不審だろ？」

「そうでもなくない？だって開場は希我くんの方に目がいってるんでしょ？だったら、多少変な行動してても深く詮索するような輩はいないと思うよ？」

「あ、成る程。……」

その後も作戦について話し合ったが、結局、俺の作戦は穴が多すぎると言う形になった。俺、ダメダメじゃん。

「……」

「ほ、ほら、元気出して、希我くん！まだ作戦なんていくらでもあ

るよ！」

「……ホントに？」

「う、うん！今度はあたしも手伝うからさ！……だからそのテンションション止めて？あたしは、いつもの元気でカッコいい希我くんが好きだよ？」

「なんか、その急な告白が俺のやる気を削ぐんだけど、それはまぁ、この際いいや。で、具体的な案はある？」

「えっとねー……」

いをはしばらく目をキョロキョロさせると、俺の手元で眼球を止めた。そして、俺の手元からある物をひったくるように取った。

「ちょっとズルいけど、これを使おうよ」

いをは小悪魔的笑みを浮かべながら、さっき貰った領収書を開いた。

—１０　交渉（後書き）

あと１話くらいで火曜日が終了。

このペースで書いてたら、試合が始まるのはいつのことやらｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

―11　兄（前書き）

久々のマウスピースの更新です。

うう、眠い…とある実況者さんの配信見てきて頭がボーっとする

…

―11　兄

いをに手を振って独りで歩いていると、小降りの雨がアスファルトをしとしとと黒ずませている事に気が付いた。あまり濡れたくなかったので、公園の反対側、住宅地に沿って歩く。

すると、見慣れた赤茶のショートヘアーを公園のブランコに……昨日、稜ちゃんと話したあの場所に、座っているのを見かけた。

やれやれと思って、ざっ、ざっと彼女に近づく。

「何してんだ？風邪引くぞ？」

「……あんたがちゃんと来るか、確かめるために待ってたのよ……」

「おい……まだ朝の事怒ってんのか？悪かったって。今度なんかおごってやるから、元気出してくれ。な？」

「べ、別に、怒ってなんか……」

何か言いたくて、でも言いたくない。そんな困ったような表情が彼女に浮かび上がった。……何だろう？

「……稜ちゃんの家、行くんでしょ？」

「…あぁ」

「……じゃ」

ブランコを後ろまで引いて、足を地面から離すエアル。ブランコの角度が７０度くらいに達した所で、手で鎖を掴むのも放棄。宙に飛んだ彼女はまだかなり高さがあるのにも関わらず宙返りを2回転成功させ、「？！」体操選手のような着地をして、こちらを見た。

「行こうか、鈴木家。あたしもついていくからさ……って勘違いしないでよね！別にあんたが…」

「ちょっと待てーーー！お前の典型的ツンデレを日が暮れるまで楽しむのも悪くないが、その前に俺はツッコまなきゃいけない事がある気がする！」

「……？　あぁ、そうね。よい子のみんなは危ないから真似しないでね！」

「着眼点は間違ってないけどそれも違う！つかまずキャラが違う！俺が言いたいのはお前の身体能力の異常さだ！」

「そ、そんな言い方ないじゃない……確かに１００メートル走のタイム1時間は確かに身体能力を疑うけど……」

「そうだったの？！そりゃ異常だけど俺は今この場で急にやった新体操部顔真っ青のパフォーマンスについて聞いてるんだが！」

「もー、そんな事どうだっていいじゃない。大事なのは、今、この青春を駆け抜ける事でしょ？」

「いやいやいやいやたった今は自称鈍足女が砲弾の如く飛んだ理由を聞く方がよっぽど大事だわ！」

「？　砲弾？誰の事？」

「ここに来てまさか自覚皆無発覚！」

「ほらごちゃごちゃうるさい！いいから行くわよ！」

「良いわけねーだろ馬鹿女……ってごめんなさい！貴女の握力で首根っこ掴まないでー！」

少し雨が強くなる中、俺は怪力鈍足という微妙なステータスを持った幼なじみにずるずると引きずられったのである。

今は少し入りづらい、鈴木家へ。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

ぴぃんぽーん……。

分厚い雲に閉ざされた静かな空間に電子音が鳴り響く。インターホンのライトが、若干暗い空の中明るく光った。それは、鈴木家のどちらかがこちらを見ているということだが、今はもうかまってられない。ちゃんと謝らなきゃ、ケジメがつかない。

返事としての低い声は、割とすぐに来た。

「希我君、か……」

しかし、声の主は兄貴の方だった。

「鈴木さん……あの、り……」

「稜ならまだ帰って来てないよ。多分、茶道部に出てるんじゃないかな？どうする？俺から謝っておこうか？君も今度の試合に向けての準備があるでしょ？」

「……稜ちゃんから、話を聞きました？」

予想外だった。彼女はそういう重い話は家族…兄にはしないと思ったが……。昨日から、彼女の行動力というか、想いの強さには驚きを隠せない。

……いや、家族の事がそれほど大切という裏付けなのかもしれない。そう思うと、なんだか胸が切なくなった。

…と、何の前触れも無しに玄関のドアが開いた。そこから出てきたのは、やはりこの家の主だった。

「いやー、昨日の夜いきなり稜が泣いて帰ってきた時には流石にキミを殺そうと思ったけど」

背筋がゾッとした。この人が余程のシスコンなのを考慮するのを忘れていた…。

「でも、事情を聞いたら悪いのは…

俺だから」

『は？』

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「まぁ、テキトーな所に座って」

客間らしき和室に通された俺達はお茶を出す鈴木さんと共に座布団に腰を下ろす。全員が湯飲みに口を一回つけると、エアルが話を切り出した。

「鈴木さん……『悪いのが俺』って…一体どういう…？」

「……。っていうか、何でエアルちゃんここにいるの？」

「あ、っと…えとですね…」

「俺が連れてきたんですよ。事情を説明して」

「…え！？」

エアルが困惑の声を上げる。俺は構わず喋り続ける。

「偶然、俺が昨日公園へ歩いていくのを見ちゃったらしくて。で、何してたんだって言われちゃいまして。今日もついて行くって聞かなくて」

「そうか…」

「ちょ、ちょっと…」

「あ？」

エアルは俺の服の裾をちょいちょい引っ張り、小声で話しかけてきた。

「（何で、正直に言わなかったの…？　別に言ったって…）」

「（直接現場を見るのと話を聞いたってだけじゃ向こうの対応が変わる。もしかしたら、お前は巻き込まなくて済むかもしれない）」

「（な…！　何ソレっ！　あたしじゃ、頼りにならないってコト…！？）」

「（わかってくれ。できればやっかいな事に巻き込みたくないんだ。お前ら全員）」

「…そう、分かったわよ…」

俺達の会話はエアルが折れるという形で一端終了。さて、問題は…。

「さ、俺の話…っていうか、懺悔、聞きたいよね…？」

鈴木さんの言葉に、頷く。

「何から言っていいものやら…分かんないけど、まずは…」

そして鈴木さんは開口一番、重大な…本当に重くて、大きい事実を、俺達に伝えた。

「俺と稜は、本当の兄弟じゃない」

…？

意味が、よく分からない。

「俺の、本当の兄弟は…」

だって、稜ちゃんは…

「翔の…お前が週末に戦う双子の男の、方なんだ」

―11　兄（後書き）

さて、今回も空白の多い書き方にしましたが、いかがでしょう？
変えて欲しいという要望があれば、空白少なくしようと思います。

感想欄か、俺のＳｋｙｐｅにご意見をください。

Ｓｋｙｐｅ友達募集中。ＩＤは小説家情報＝フィア　をクリック！

―１２　食中毒（前書き）

要望があったので、今回から間隔の狭い文章の書き方にしました。

「前の感じの方が好きだった！」って方は、感想欄か俺のＳｋｙｐｅ（詳しくは小説家情報＝フィアをクリック）にご連絡ください。

―12　食中毒

水曜日。
昨日降り出した雨は次第に強さを増していた。

俺は雨が好きになれない。
じめじめするし、洗濯物は乾かないし、ロードワークは出来ないし、その他諸々の事情で。
今日は特に、一言で言うなら、鬱だ。
昨日あんな話聞いちゃったし、どうしよう、めんどくさい。

しかし試合は待ってはくれない。
どっちにしろ、小松翔に勝たなきゃ、何も始まらないのだ。

という訳で、今日もボクシング場に足を踏み入れた、のだが…。

「…？　誰もいねぇ…」

人の影一つ、なかった。
ほわぁい？
おかしい。超適当なあいつらだが、、この時間はなるべく練習をするようにしている筈だ。
だからこそ、俺は今日もここに赴いたのに…。

「まぁ…いないんじゃ、しょうがないか…」

まぁ、筋トレなりパンチングボール弄りなりは出来るしな。
しょうがない、今日は一人で軽くアップする程度にしよう。

俺は奥の扉へと足を進める。
俺は怪我した右手ではなく、包帯を巻いてない左手で部室のドアノブを回した。
医者の話じゃ、明日には治っているらしい。
なんか、自分で自分が怖ぇよ…。

「ん…。あれ？」

部室は、電気がついていた。
誰かいるのか……いや、気配はない。
第一、あいつらがいたら近所迷惑なほど騒ぎすぎて、すぐ分かるだろ。
誰かの消し忘れだと思い、俺は気にせず部室に入っ…。

むぎゅ。

「……？　って、な……！」

何か踏みつけた。
固い筋肉の感触、見知った角刈りの頭、そしてＤＱＮらしい間抜け面。
それは紛れもなく。

３馬鹿トリオの一角、俺の同級生、田中…！

「おい…！　しっかりしろ田中！　何でこんな所で寝てんだよ！」

そういや、昨日もいなかったな…。
俺と秋山は気にもしなかったが、ま…さ、か……こいつ…！

「お前っ、昨日からずっとここにいたのか…！？」
「……」
「おい…返事しやがれよ…！」

何でだ！　何でコイツが倒れてる…！？
俺は状況を正確に判断するために、周りをよく見る。
きったない下着、こいつの鞄、ブレザー、そして…！

一口食べられた紫色のクッキーと、ピンク色の包み紙…！

「そうか、お前…！」

なるほど、分かったぞ！

「お前は昨日の朝、お前に恨みを持つ女子生徒…あ、この前お前にパンチラを盗撮された藤林か！　あいつに校舎裏にでも呼び出され、『私の気持ちです。よかったら食べてください』なんて言われたんだ！
ニヤニヤが止まらなかったお前は誰もいない授業中の部室に来たんだ！
クラスに来ようものなら、お前の気色悪いニヤけ面を晒す事になるからな！　そんなの、その面を見るこっちの方が虫唾が走るわ！
で、包みを開けたお前はこの変な色の菓子を見て
「失敗しちゃったんだな…大丈夫、俺が君の想いごと、全部胃に納めてやるぜ（キリッ　ぐぇっへっへっへっへｗｗ」みたいな事を言いながら舐めるように一口食べたんだ！
そのあまりのマズさと、毒々しさにお前は全身を駆け巡るような痛みに駆られたんだ！
その痛みにお前は必死の抵抗をしたんだ！　そこに破られているお前のブレザーが証拠だな！

しかし、その痛みに…耐えられず……お前は……っく！」

思わず、コイツの顔から目を逸らしてしまう…。

なんて、いい顔で寝てやがるんだ…く、くそ…！

「な……なんで……っく…ｐ……お、お前って奴は…くっくっく…ごほっごほぇっ！　なんて…なんて…ｐｐｐ！」

ダメだ…耐えられない…！

「ぎゃあーはっはっは！　なんてアホな奴なんだ！　ばっかでぇー！　ぎゃはははは！ｍ９」

「……」

なんだこいつ…。

まじ面白い！　こんな馬鹿久しぶりに見たぜ！

「お前にクッキーくれる女の子なんてナメ○ク星人くらいだよ！ぎゃはははは！　俺の推理が間違ってんなら起き上がってみろ…」

「だいたい合ってるけど腹たった！　そしてカッとなってやります！　反省はしません！」

どごっ！

「うにゃあああああああああああああ！」

急所（下半身）にオーバーヘッドキックを受けた。

お、俺のタマはサッカーボールじゃねえよ…。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「今回の件は藤林が犯人じゃない…」
「え、そうなのか？」

大事なトコロを擦りながら、俺は自分の推理が若干間違っていた事を知る。
しかし、なら、これは誰が…？

「誰かは、俺も分からなかった…だが、思い出せばあの鞄は…」
「？　分からなかった？　ウチの学校の生徒じゃねえのか？」

未だ痛いのか、田中は腹を抱えながら頷いた。

「たぶん…いや、絶対に…西高の、生徒だ…！」
「！」

「そうか…俺が…！」
「どういう事だよ？　何で…」
「多分確実だが、まだ俺の、推論の域を超えられない予想を、聞いてくれるか？」
「あ、ああ…」

※　※　※　※　※　※　※　※

「臭っ！」

いつの間にか俺は、下水道の暗いトンネルを歩いていた。
つまり、どういうことだってばよ！？

―12　食中毒（後書き）

さて、俺なんかの駄文を読んでいる方の中には女性もいるかもしれないのに、読み返してみれば、下ネタばっかでした…。

本当にごめんなさい…

ま、みんなは優しいだろうから、平気だよね！

…え。いや、『兵器』じゃないから！　核ミサイルは撃っちゃダメ…

…アーーーッ！

本当に申し訳ないですm（＿　＿）m

―13　侵入（前書き）

今日腹痛で病院へ行きました…。

急性胃腸炎だそうです。

皆さんも体調には気をつけてくださいね……

って今腹巻きしながら投稿しているダメ人間がここにいます^^b

皆さん、こんな人間にならないようにしましょうね！

―13　侵入

「えっと、あと５０メートルくらいで学校の地下…うをっ！　…あ、なんだネズミか…」

ビ、ビビってないし！

下水道をライト片手に歩いていく俺。
雨が降っているので、いささか…いや、結構水が多い。
足を踏み外すと流されてしまいそうだ。

しかし、やたらひどい臭いだ。
汚染された水の、この紫色の何かが、今回の事件の鍵を握っているのだろう。
その紫は…。

「お、此処から流れてるな…」

梯子のすぐ隣の、パイプから大量に流れていた。
となると、やはりあのクッキーは、西高の生徒が作った物で間違いないな。

俺は錆び付いた梯子を登り、上の水市西高等学校を目指す。

※　※　※　※　※　※　※　※　※　※

「月曜日の騒動、覚えてるか？」
「いや、何しろその事件の関係者になったんだけど、俺」
「あ？　あーなんか秋山がメールで言ってたな……お前があっちの一番強いボクシング部と一騎打ちだって…それか？」
「あぁ。参ったもんだぜ…」

とりあえず彼の破り捨てられたブレザーを丸め、枕代わりにして頭を話しやすい角度にしてやった。
悪いな、と謝るその声音には、さっきまでの元気さとは遠く離れていた。

「俺と部長、その前には他の部員があいつらのケンカを止めようとした事は聞いたか？」
「あぁ。千沙さんから聞いた」
「俺達はその時、顔に紫色のパイを投げられたんだ」

知っている。ひどい臭いだったと、千沙さんは語っていた。
ん？　ひどい臭い？
話の内容が分かりかけてきたかも…。

「それを喰らった先輩たちは、謎の腹痛で入院さ」
「！？」

ど、通りで誰もいない筈だ。

「偶然口に入らなかった俺はその謎の紫色のお菓子の危険さに気付き、西高へ乗り込もうとしたんだが…」
「何者かに、口止めの意味で毒を盛られたと…」
「そうなる」

「…くっ」

俺は拳を床に叩きつける。

未だ相手の行動の意味が分からないが、毒を盛るなんて…許せねぇ…！

何より、俺のダチに、なんて事を…！

「俺が昔聞いた事なんだが…どうやら西高にはアブナイ薬品、及び料理を作っている集団がいる…。おそらく、家庭科部だ…」

「家庭科部…！」

「頼む、その謎の薬品かなんかをなんとかしなければ、やばい事になるかも…」

「あぁ、言われなくたってやるさ。俺もそんな物食いたくない」

「あと、この話は誰にも話すな…。俺のように口止め目的で毒を盛られるかもしれない…」

「……分かった」

俺は立ち上がり、その場を後にする。

その毒とやらを根絶やしにした後でなければ、コイツを病院にも連れて行けない。

一刻も早く、その事件を解決しなければ…。

どうやって、なんて後回しだ。

まずは、難攻不落のあの高校に侵入しなければ…。

ん。それこそどうすればいいのだ？

校門から入ろうとすれば射殺される（トマトケチャップ弾に頭から被弾するらしい）し、塀を登ろう者なら竹やり（プラスチック製）が降ってくるらしいし…。

…まぁ、なんとかなるだろ…。

「じゃあ、行くぜ…」
「…俺達の高校を…頼んだ…」
「…田中……一つ、聞いていいか？」

俺は彼に向き直り、とある疑問を投げかける。

「何でお前、あのクッキー食ったんだ？」

「いやぁ、舞い上がっちゃってねーテンションがｗｗｗ　そいつが誰かを確認する前にホップステップでこの部室に…ごふぅ！」

最後の一言は殴る事で口が閉じたので、聞き取る事が出来なかった。

なんてバカなんだ。こいつ…。

「しかし、侵入方法が分からん…」

俺は傘を差しながらなんとか西高周辺にやって来たのだが…。

ヤバイな。噂通りだ。

塀には小型機関銃らしき物体はあるし、校庭には不自然に草が丸を形取って地面に接してるし（要は落とし穴）、屋上からは馬鹿デカいライトが近隣の公道すら照らしてるし…。

もう、要塞の域だ。
どうやって侵入しろと言うのだ…。
「普通に入るんじゃダメだなこりゃ。となると…」
裏か。
上か。
もしくは。
…下か。

※　※　※　※　※　※　※　※

「しかし、学校活動の一環で毒作りとは…教師は何の為にいるんだ…」
カツン、カツンと金属の梯子を昇る。なんか、スネ〇クみたいだな、俺。
おっと、ここから入れるな。
俺はゆっくりと、上への入り口を、開ける。
「……。ここは…」
頭だけ顔を出すと、そこは…。

「んなっ…！」

めちゃくちゃ、研究所だった。
もしくは、悪の総本部。
イメージとしては、ショ◯カーの本部を想像していただきたい。
薄暗い電球一つで、怪しい実験を繰り返す場所。
ぐつぐつ煮える紫色の鍋や、変な色のフラスコは、この光景をそう捉えるのに充分な代物だった。

「ここが…毒の、製造場所…？」

誰もいない事を確認し、俺は足を踏み出す。

周りを見渡す。
包丁、お玉等の調理道具は、謎の液体でひどく汚れていた。
真っ黒なカーテンの傍には、例の液体がたっぷり詰まっているシンク。
なるほど、下水道の汚れは、ここから来てたのか。

謎の液体の入った鍋に近寄る。
その周辺には、固形状の同色の物、スライムみたいな物までいろいろ転がっていた。
それらからは、さっきのクッキーと同じ臭いがした。

「これは…ドリアン…？」

いや、いろいろ混ぜ込んでるな…。

……。

ヤバイ…。
頭が、クラクラしてきた…。
早いところ、この紫色の何かを処分しなければ…。
俺は鍋の取っ手に触れようと、した、その瞬間。

――――ヒュッ……！

「！？」

パイが、飛んできた。
体を引くことによって、なんとかその攻撃を頭から離させる。

そして、不意の少女の声。

「見られちゃいました、ネェ……」
「だ、誰だ…！」

思わず、素っ頓狂な声を上げてしまう。
飛んできた方向を向く。

声どおり、そこにいたのは女の子だった。
背は高くも低くもなく、平均、というくらい。
手足は細く、体の起伏もあまりない。
胸以外は、エアルと似た体つきだった。
決定的に違うのは。

紫色のトンガリ帽子と、腰にぶら下げたフラスコの数々、そして

左手の紫色のパイ…！

「お前…！」

「ここを見られたら、ただじゃ、帰せませんヨ…？」

少女は、口を凶悪に吊り上げ、帽子をクイっと上げて、焦点の合ってないその両目で俺をロックオンした。

―13　侵入（後書き）

次回は久々のバトルです。

―14　彼女（前書き）

ゴメンナサイ。
まだバトルじゃなかったです……。
ごめんｐ―ｗｗ

―14　彼女

俺の頭上を、紫色のパイやケーキ、クッキーがすれすれで飛んでいく。
テーブルを壁にしているので辛うじてダメージを受けていないが、このままではジリ貧だ。

「アハハハハ。隠れてるだけじゃ、此処からは出られませんヨ？」
「うっせ！　それよりお前の目的はなんだ！　何でこんな物作ってやがる！？」
「答えて欲しいんですカ？　なら、教えてあげないこともないですケド」

もったいぶるように彼女はまだ答えない。
最近忘れ去られている設定だが、一応キレやすい俺はその言葉に苛立ちを隠せない。

「いいから言え！　お前の目的は…いや、その前に、お前は誰だ！」
「しがない、家庭科部ですヨ？　橘　希我サン」
「…あ？　何で俺の名前…」
「有名人ですヨ、私たちの学校でハ」

少し顔を上げて、表情を伺う。
西高の制服を纏った少女は、帽子に隠れていたその目を顕にした。
彼女の目は、憎しみに満ち溢れていた。
俺への、というよりは、大きな何かへの憎悪。
理由があるのだろうか。

「俺はお前の名前を名乗れって言ったんだ」

「……私は」

彼女は表情を変えた。
そこにあるのは憂い。
悲しみ、だった。

「西高3年2組　家庭科部部長　毒島（ぶすじま）　可憐（かれん）。今週末貴方が戦う小松翔の、元カノです」

「アイツの…」
「別に、彼に言われてやったとか、そんなんじゃないので、彼にちょっかい出さないでくださいネ。今回の件は、私の独断なのデ」
「……狙われていたのは、俺の学校でも、ボクシング部でもなくて…」
「何を意味するのか、分かりますネ？」

俺は今一度、顔を隠して考える。

倒れていたのは、俺の知り合い。
ボクシング部。
怒りは頭に血を昇らせる。
ここに来るという事の想定。
つまり…

「狙われていたのは……俺…？」
「貴方を試合で不戦敗にする為、ですネ」

…マジかよ。
…その為に…。

「その為に、関係のない俺の仲間を苦しませたのか！？　そんなの、間違ってんだろ！！」
「仕方ない事デス。貴方には、一週間は寝込んで貰わなければなりませんからネ。大変だったんですヨー？　部員のみんなにパイ投げてもらったり、クッキーを渡しに行って貰ったり」
「てっ、めぇぇええ！」

思わず、体を出してしまう。
しかし、そこに人影はなかった。

「後ろが、がら空きですヨ？」
「ッッ…！」

背中に、回り込まれていた。
瞬間的に反応しようと思うが、背中に何かを突きつけられる。

「動かないでくださいネ？　動くと、今すぐに貴方の背中が血まみれになりますヨ？」
「くっ……」

俺は硬直し、口だけを動かす。

「おい、何でお前はそんなに小松翔を勝たせたいんだ？」
「フフ。いいですヨ、教えてあげマス」

彼女は笑った。

表情は見えないが、楽しそうに、ではなかった。
こうするしかない、みたいな、心の場所がない雰囲気。
彼女は話し出した。
彼の、この先待ち受ける苦難を。

「彼は、」

「勝たなきゃ、彼でいられなくなるんデス」

「？　どういう…」
「意味、ですカ。そのままデス。彼が、小松という名字では、いられなくなるという事デス」

……。
いやいやいやいや。

「だいたい状況はしってるけど、日本語でおkなんだが…もっと読者に分かるように…」
「馬鹿にしてマス？」

背中に硬いものが触れる。
俺は冷や汗を体中に掻いている事をバラさないように、彼女の説明不足を言及していく。

「…アイツの、親が関係しているんだよな…？」
「…よく、分かりましたネ。どうしてその事を……？」

「……とりあえず、この体勢が嫌なんだが…」

すると彼女は黙った。

数分。緊張感で、妙な沈黙が永遠に感じられる。

「……いいでショウ」

背中に風が当たった時、ようやく自分が解放された事を知る。

と思ったら。

「……あの、腕が動かせないです…」

「当然デス。両手を縄で縛ってあるんデスから」

腰を回して見た家庭科部部員は、犯罪級の悪事をしれっと言いのけた。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

「どうぞ。腰をおかけクダサイ」

「……なんか、妙な気分だな。さっきまで自分に襲い掛かってきた奴と、こうやって向かい合って会話だなんて」

「心配しなくていいデスよ。話を聞いた後は、すぐに口の中に毒を流し込むのデ」

俺は用意された椅子に、毒島と向かい合うように腰掛けた。

腕を背中で縛られているので、若干座り辛いのだが、今はそんな事を気にしている場合ではない。
このドシリアスな状況で、どんな事を聞かされるのか。
そればかりを気にしてしまう。

「……お前は何を……そうじゃないな。どこまで、知っているんだ？」
「貴方から先に答えてクダサイ。断る権利は今の貴方には無いですヨ？　状況的に優位なのは、私なのデスから」
「……変な事に拘るな……」

壁に掛けられている銀縁の時計を見ると、時刻は６時をまわっていた。
店のみんな、心配してるだろうな…。
そう思ったが、同時にまさか監禁されているとは夢にも思っていないだろうなと、心の中で嘆いた。

俺は彼女に今回の事をおおまかに話した。

東高と西高のモラルにおける障壁。
鈴木家と、小松家の蟠り。
そして俺が試合当日、どのような作戦を企てているか――――

もちろん、そこに俺の感情論は挟まなかった。
伝えたのは、事実と思惑。

毒島は、悲しそうに笑った。

「貴方……大変デスね…」
「そうだな。そう思うならこの縄を解いてやってくれないか？」

「その時には貴方に意識は無い筈デス」

さて、と彼女は息をつく。

その仕草になんか心が揺らいだのは、ただ単に俺が男だからなのだろうか。

「話して貰ったので、ちゃんと私も報酬として情報を差し上げマス。世の中、そういうギブ＆ａｍｐ；テイクが重要ですからネ」

そして彼女は、話し出した。

まだ全然正体の掴めない男『小松　翔』の抱える問題を。

「彼は秀才デシタ。

彼は頑張り屋デシタ。

彼は努力家デシタ。

少し弱気な性格でしたけど、みんなから慕われていて、とても心の優しい、私の恋人…

でした。

彼は実力で、部内随一のボクシング選手になりました。

まだ１年なのに、部内の男子全員Ｋ．Ｏ．にしちゃって、私達の学校では噂が流れました。

そんな彼と付き合えて、とても誇らしかったです。

ですが、彼は私に言いました。

別れてほしいって。

最初は、意味が分かりませんでした。
今まで、私達の関係にヒビが入るような事は、一度も無かったんですもん。
私は問い詰めましたが、彼は答えてくれませんでした。
ただ一言。

妹の、為、だって。

それが、今貴方が話した稜ちゃんの事なんですね…。
なんとなく、彼女を恨んだ時期もありました。
顔も知らないのに、彼女の顔を想像してひたすら料理に自分の負の感情をぶつけていました。

そして彼はひたすらボクシングに打ち込みました。
私は彼の家にこっそり忍び込んで、その資料を見つけました。
彼の、戸籍と、日記です。
彼の部屋の机に、置いてありました。
それは、貴方もさっき話したとおり。

彼が、彼の両親と血が繋がっていない事、それを裏付けていて、

そして日記には、

彼の両親の人非道的な、行為が…」

「……」

彼女の語尾の変なイントネーションは、キャラ作りだったんだろうか？
そのキャラを失うほど、辛かったのだろう。
彼の事実を。
彼の偽りの両親の非道さを、知る事が。

「『良い成果を残した者を自分の子供とする』」

彼女は口にした。
その形は、奇しくも鈴木さんのそれとなんとなく似ていた。

「貴方の話で、私もほとんど状況を飲み込めました。
稜ちゃんが、茶道文化検定で一級を取ったという事は、彼はそれ以上の結果を残さなければならない。
そうしなければ、稜ちゃんが……」
「だから、アイツを不戦勝にさせるのか？」
「今回負けなければ、とりあえずは、時間が出来ます。
彼は全ての物事を丸く治めるために、勉学、運動、検定、立ち振る舞い……全てにおいて、良い結果を残すはずです。
ですが……貴方のその力は強大だ。
だから……彼が勝つ為に……彼の行為を無駄にしないために、私は何処までも汚れるのデス」

理解した。
今回の事件の事、全てを。
あとは、アイツの心中を知れば、俺の疑問は解消される。

「だから…お願いだから…、せめて、不戦勝でいいんです…お願いします…」

「負けて、ください」

彼女は、頭を下げた。
俺は考えた。
考えて考えて。
考えて考えて考えてかんg…
「ふッ――――――――――!!」
「……？」

「ざッ!!けんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」

考えた。
縄を解く方法を。
でも相当難しい縛り方をされていたので。
縄を、無理やり引きちぎる。
「な……！」
縄の切れカスが宙を舞う中、毒島が唖然としていた。
俺は勢いに任せて言う。否。叫ぶ。
「小松翔がどんな事抱えて生活してるとか、稜ちゃんがあのクソみ

たいな親達に引き取られるとか、そんな事はどうだっていいんだ！
そんなの、俺達が深入りする必要はねぇ！！」
「そ、そんな無責任な！　なら、貴方は彼らが不幸のどん底に落ちてもいいんですか！？」
「知るか！！
だいたい俺は、そんな事話しに来たんじゃない！
俺は俺の仲間が苦しんでるから、此処に来たんだ！！
そしてお前が俺の仲間を苦しめた！！
それは紛れも無い事実で、俺にとっては許しがたい事なんだよ！！
だから俺はお前をとりあえず殴るし、帰ったら仲間と一緒に週末の試合の為の作戦を練る！！　店の準備もする！！　俺は試合には出る！！！」
「そんなの、人でなしに他ならないです！　何だってそんな事が言えるんですか！」

それは、お前が彼の特別な何かだからだ。
俺はアイツの…。

「俺は、ただのアイツの対戦相手だからな」
「だ、だったら……！」

そして彼女は立ち上がり、フラスコに手を掛ける。

「貴方には、当分病院で、生活して貰いマス……！」
「それもいいさ。我を通すために実力を行使するのも」

俺も立ち上がる。
左手の包帯を解く。
傷なんて、どうでもいい。
もう壊れたっていい。

彼女の考え方を叩きなおすなんて言わないけど。

俺も俺の我を通すだけだ。

両手を胸に。

構えを、とる。

開戦だ。

これは、お互いの我を通すための戦い。

ー１４　彼女（後書き）

つ、次こそはバトルの……はず……！

あと今回の会話で理解しがたい内容が多かったと思います。

たぶん遠くないうちに全部繋がるようになります。

っていうかします。

……あんま期待すんなよ？

Ｓｋｙｐｅ友達募集中ーＩＤはユーザ情報＝フィアをクリック！

―15　語尾（前書き）

バトルです。
久々のバトルです。
聞いてください奥さん、バトルなんですってよ？

……更新遅れた理由は後でちゃんと書くんで、許してください
……。

―15　語尾

正直な感想。

――――強い。

その言葉は、もちろん彼女の戦闘能力の事だ。
息を切らさずいろんな毒物を投げられる持久力。
その驚異的な毒性のある食品、毒物の生産力。
そして遠い所までその毒物を投げる投薬力――――

その中でも、最も信じがたいのは狙いの正確性だった。
その標準は一度も俺の口から外れていない。
しかも確実に口に入るように、顔を逸らした場所にまでご丁寧に投げてくれやがる。
もし東高に籍を置いていたなら、十中八九ランキングバトルでいい成績を残せただろう。
それほどまでの猛攻。
これでは防戦一方だ。

「逃げてるだけじゃ、勝てませんよって、言いましたよネ！？」

最初に彼女が言った事と、全く同じ。
豪語したものの、対策は無い。
だから物陰に隠れたり、必死に走り回ったりしているのだが。

「やっぱ、ジリ貧だなぁ…」

ため息をつく。

少しでも気を抜けば、俺は即病院送りだな。
だからこそ、こちらから攻撃を狙わなければならない。
何か、ないか…？
そうやって手元を見てまわる。
あるのはフラスコ、試験管、紙、髪、おたま、包丁はマズイ、鍋もマズイ、篩い、そして……。
俺は鉄の円盤と棒の融合調理道具、その名も。
『フライパン』を手に取った。
……いや、断じてボケてないぞ？

※　※　※　※　※　※　※　※　※

目の前の一つ下のナマイキな少年は、私達の部活の調理道具を勝手に手に取りました。
全く……神聖な道具に素人が料理目的以外で触っちゃいけないです……あ、間違った。いけないデス。
……。
駄目です…さっきから上手く感情をコントロールできなくて、すぐにキャラを捨てちゃいます…。
もう、めんどくさいので地の文はキャラ捨てます。
読者さんから、変な喋り方だって突っ込まれてたらしいし…うぅ。
彼、橘希我は、そのフライパンで私、毒島可憐を真っ直ぐ捉えました。

私はいかにも挑発っぽく、彼に皮肉ってみました。
「どうしたんデスか？　頭イカれておかしくなっちゃいましたか？」
「もうお前の攻撃は受けない」
まぁ、持ってる物を考えれば、何をするのかなんて想像できますけど。
だけど彼は。
笑っていました。
大胆不敵に、にやりって、意地の悪い笑みを浮かべていました。
どこからそんな自信が来るんでしょうか？
分かりません。
分からないけど。
「受けてもらいマス。じゃなきゃ、彼は……」
そう。
彼は…彼は…。
「また彼？」
少年は呟きました。
小松翔は、その鉄の塊を下ろさず、私を見続けました。
「小松翔が、そんなに大事？」
「……何ヲ……？　…ええ。大切だと、思っています」
「フラれたのに？」
「……当然デス……」
何が、言いたいんでしょう？

私には、分かりません。
私に分かる事、それは…。
「さぁ、早く私の足元にひれ伏してクダサイ」
この人を倒せば、全て丸く収まる。
それだけ。
「残念だけど……ひれ伏すのは…」
彼はフライパンを持つ手を振りかぶって……。
投げました。
「アンタだ！！」
「！？」
遠心力により、鉄板部分を軸に回転しながら飛んでくるフライパン。
…私はてっきり、フライパンを盾に毒物を退けるのかと思っていたが、どうやら勘違いだったらしいです。
変則的なカーブを描きながら鉄塊は私を仕留めようとしています。
が。
「子供騙しも、いいところデス！！」
この私が。
この、

円盤投げ世界記録（非公認）保持者であるこの私が！
「投擲において、貴方の下に回るなどありえないのデス！」
私は回転しているソレの柄を。
しっかり掴みました。
きっと、投擲スキルを磨きに磨いた私だけが出来る荒技。
しかし、私の頭の中は満足感ではなく苛立ちで満ちていました。
「この程度の攻撃で、私の裏を掻こうなんていい度胸……！」
硬直。
それは私がやられたからでも、彼が倒れたからでもなく。
私の脳が考える事にオーバーヒートしてしまったから。
だって。
私の視界から、彼が消えていたから。
「……っ、い、いったい何処に…！？」
「俺の反復横跳びの３０秒間での回数、７８回」
「……っ！？」
後ろからの声。
あり得ないはずの後ろからの、声。
あまりの驚愕で、手のフライパンを落とす。
暗い部屋に鈍い金属音が響き、全身の鳥肌が腰を上げる。
私は振り向く。
そこには凶悪な笑みを浮かべる少年。

思わず、後退りをする。

「な……！」

「その数字はそのまま、俺の瞬発力とイコールになる。つまり俺は、秒速２．４メートルで動ける。俺がフライパンを投げてアンタがソレを掴むまで約２．５秒。たかが６ｍくらいの距離だったら、回り込む事くらい、朝飯前ってヤツだよ」

話が、聞こえる。

だけど、私は理解できなかった。

頭が正常に働かない。

恐怖、しているのだ。

自分の身を案じているワケじゃない。

私がここで負けたら。

きっと、あの人は試合で負けてしまう。

彼は言ってた。

《迷いがある人に、ちゃんと拳は振れないよ…》

彼は負けてしまう。

あんな目をしている人が、試合に勝てるワケない。

だから私は恐怖する。

彼が負けてしまう事に。

そんなの

許されない。

「う、わぁぁぁぁあああああああああ！」
無我夢中で手元の毒物を投げつける。
男は私の壊れたような攻撃に尻餅をつく。
足下の男の顔は毒物で溢れ、もはや形が見えない。
それでも投げる。

嫌だ。
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！
負けるのは。
彼が負けるのは。
何より。

彼の役に立てないなんて！

「嫌、だぁぁぁあぁぁぁぁあああああああああああ！」

……。
今、持っている毒物は全て使った。
その結果が、顔面紫一色のこの男。
…少しやり過ぎたかもしれません。
ですが、これくらいやらなきゃ…。

「翔君が辛い思いをしマス。それだけは…」

耐えられない、です。

私は毒物の集合体を片付けるべく、その場を後に…。

「ったく…、女の子なんだからさ、もっと清楚でいようぜ？」

……！？

再三振り向く。

彼は、立っていた。

手元のフライパンに付いた毒物を、めんどくさそうにダストシュートに振り落としている。

私の手元の毒物は……、

0。

「さ、さっきフライパンを投げたのはっ…」

私の武器を消費させるため……？

それを肯定するように、彼はため息を…、いや、安堵の息か、それをした。

「まさかフライパン掴まれるとは思ってなかったんだが、まぁ、結果オーライだな。コレで、

至近距離で、アンタをぶん殴れる」

「……っ！」
「覚悟は、したはずだよな？」
「……」

ダメで、す。
私の……。
私の……！

「負　　け　　」

何もかもが。
溜め込んできた全てが。
掬い上げた水のように。
零(こぼ)れる。

「約束どおり

一発……！」

「…！」

目の前で振り下ろされるその手に。
目を、瞑る。

……。
……。
……？

ぽふん。

「……え？」

ちょ、チョップ…？

しかも、壺を扱うように優しく、手を、置きました。

置いただけ。

私は混乱です。

「え……っと……？」

「……いよなぁ…」

「ほ…へ…？」

「大事な奴が頑張ってる時に、

自分が何も出来ないのは、辛いよなぁ……」

……。

この時の私は、ものすごく目が飛び出てたと思います。

同時に、

ものすごく、目頭が熱かった気がします。

「稀に、人間、本当に大事な時って、他人に干渉されちゃいけない時がある。

そうじゃない場合のが多数だから、どうすればいいか分からなくなるよな…。

友達に助けて欲しくても、恋人が助けてあげたくても、手が出せない、出させない時。

すっげぇ、辛いよな」
「……」
「そういう事件、出来事は少ねぇクセに、それで辛い想いをする奴が多いのって、理不尽だよ…」

……。
俯きます。
頭の上で、大きな手が私の変な髪の毛を撫でていました。
いつの間に帽子脱げていたんでしょう？
と思ったら、彼が持っていました。
彼はその帽子を持ったまま、左手で優しく撫で続けていました。

「だけどさ、人間同士の問題だから、しょうがない時もある。
……しょうがないっつーか、まだ、何も出来ないし、流れに身を任せなきゃいけない時だって、やっぱあるんだよ。
助けたい奴に、手を伸ばせない時あるんだ」
「……」
「でも」

声音が、変わりました。
力強い、声。
確実な確定を帯びた、心強い発言。

顔を上げます。
目は、私の髪で隠れた…随分切っていなかった前髪を越して、見ていました。
「そういう時はさ、

誰かの前で、泣けばいいんだ」

「　　」

「抱え込まないで、出しちゃえばいいんだ。

そうすりゃ、良くも悪くも、自分の中でいろいろ変わる。

良くなりゃ万々歳だし、悪くなっても、きっと誰かが気付いてくれる。

一人で、辛くなってなくて、いいんだ」

「……。……今」

「ん？」

「今、泣いて、いい、デスか？」

「その無理やりなキャラ止めたらな。喉、痛いだろ？　わざわざ引き篭もる為に、そういうめんどくさいキャラ演じなくていいぞ？」

「……頭の中、覗けるん、ですか？」

「経験済みだからな」

「そう……ですか……」

そして私は立ち上がって。

フライパンを拾い。

振りかぶって。

「う、わぁぁぁあああぁぁぁんんん！！！！」

投げました。
叫んで、水を溢して、口を大きく開けて、頭を掻き回して。
手当たりしだい、周りに投げまくりました。
そのストレス解消法は、私が投力に自信があるからなのでしょうか？
よく分かりません。
分かりませんが、
とりあえず。
投げます。

年上ぶって私を撫でた後輩は、既に教室から出たのか、いなくなっていました。
それを裏付けるかのように、教室の戸は開いていました。
……ちょっとした所で、気遣いが足りませんね。
これじゃ、部活中のみんなに、この騒音、届いちゃうじゃないですか。
でも、まぁ、それは、どうでもいいです。

とりあえず。

「う、わああああああああああああああああああああああああああああああああんんん！！！」

泣いてやりまくります。

大事な、大事な人に、どうしてあげれるか、考える前に。
今までの行為を悔い改める前に。
泣くんです！

その悲鳴のような、歓喜のような泣き声は、水市の東側の高校の最上階、そこで居眠りをかましていたアホ会長をも起こしたとか起こしていないとか。

どっちにしろ、すぐ傍の西高ボクシング場で汗を流している真面目で、私の大好きな人には、届いていたそうです。

…なんか恥ずかしいけど、すっきりしました。

2年3組　毒島可憐

です！

―15　語尾（後書き）

はいどうもーフィアでーす。

さて、次の回でこの物語、おそらく中間地点です。
まだまだ長くなりそうですが、どうぞお付き合いの方よろしくお願いしますm―　―　―）m

で。

今回更新遅れた理由ですが……。
長くなりそうなんで活動報告の方に書いときますね＾＾；

……。

ち、違うんだ！　逃げたわけじゃないんだ！
あ、ちょ、おま、何する……アッー！

―16　鉄則（前書き）

久しぶりの更新。
遅れてごめんね…

―16　鉄則

「おじゃましまーす！」

ドアを開ける。
むさ苦しい熱気と蛍光灯の眩しい光が、汚い部屋から滲み出る。
中にはごつい男共が。
…どこもかしこも、こんな物なのだろうか？

ボクシング部って。

「あぁー？　いったい誰……！　お、お前は！」

ギロリという鋭い視線は、すぐに動揺へと移ろいでいく。
慌てふためきながら俺を見る連中の奥には、目的の人物が汗をタオルで拭っているところだった。
ようやく、彼もみんなの気持ちを察したのか、周りをきょろきょろ見て。

俺を見つけたようだ。

「……」
「小松翔ー。ちょっと話があるんだけどぉー」

のんびり、告げる。
その効果は、ただゴリマッチョ共を荒ぶらせるだけ。

「き、貴様！　何が目的だ！」
「翔を試合前に戦闘不能にさせようってのか！？」

「絶対にさせないぞ、そんな事！」

ふむ。

すっげぇめんどくさくなった。

まぁたぶん、大丈夫だろ。

「…みんな、落ち着いてください」

だって。

「僕も彼と話がしたい」

そう。

あっちも此方と接触したいはずだ。

※　※　※　※　※　※　※　※　※

時は遡って昨日。

湯飲みを持ったまま固まった俺の前には、頭を悩ませる鈴木さんの姿。

エアルの顔は……あぁ、ダメだ。なんとも筆舌し難い…っつーかしちゃいけない物と化している。

そこから何も言えなくなった俺達に鈴木さんが話したのは、確かこんな感じだったと思う。

「まず俺の一つ目の罪は、半分血の繋がった妹に嘘を教えた事だ。
あいつの父親。それを偽ったんだ。
稜の本当の父親は西区でのうのうと暮らしている俺達の母さんと一緒に暮らしてる、あいつだ。
俺達を見捨てた馬鹿親父は、俺と翔の血族なんだ。
何で、あいつらが翔を選んで、俺達を…いや、稜を捨てたか。
単純に、

能力のある方の子供を自分の配下に置きたかったんだ」

「……？」

あ、あのー。

「さっぱり意味が分かりませんのでございますありますが…」
「俺は君の日本語が分からんよ」

へんてこな会話。それほど混乱してんだから、仕方ないだろ！
ほら、エアルに至ってはもうなんか目ェぐわんぐわん回してるもん！　頭から煙出てるもん！
とまぁ、一通りボケたところで会話再開。

「まず一つ、何で稜ちゃんに嘘付いたんですか？」
「たぶん、アイツは耐えられないと思うんだ。
アイツは、まだ子供だよ。
すぐに感情を表に出すガキんちょなんだ。
だからこそ、稜には教えられなかった。
自分がもう一人の兄貴より劣っているから追いやられたなんて、

アイツには教えられないよ」

鈴木さんは茶を啜る。

うむ、俺にはどうしようもない、事なんだ。

ここまで関わってきてしまったなのに、ここに来て、知った事を後悔している自分がいた。

だけど人間は、覚えるより忘れる事の方が難しい生き物だから。

俺もエアルも、こうして俯くだけになっている。

「で、今回の件だが。

俺達の母親は、大変自分の息子にお怒りらしい」

「…？　それはどちらの息子さんですか？」

「俺……じゃなくて、翔の方だ」

……？

2人して首を傾げていると、鈴木さんは笑って…いや苦笑して、説明した。

「君のトコの部長にボクシングで負けたんだって？　アイツ」

……。

いや。

「存じ上げてませんけど」

「ありゃ。……まぁ、あの頃は、新人の新人だったらしいからな」

……？

全く意味が分からん。

「4月のボクシングの試合があったらしいんだが」

「あー。ありましたけど」
「そこで、東高の部長とぶつかって即負けたらしい」
んー？
俺は記憶を辿る。
というか。
「武藤部長は全国一位だから、負けるほうがおかしいんですが…」
「そう。でも、あの家で負けは許されないんだよ、翔にとって。
でもって。
稜はこないだ、
茶道検定で、1級を取った…」
鈴木さんは俯く。
見れば、湯飲みを持つ手が震えていた。
「あの家のたった一つにして、最低の鉄則。
双子を産み、片方は別の男の子供である事実の下であいつらは…」
「能力の高い方を、自分のセガレにする…」
「…そーいう事」
「そんな…」
エアル絶句。
俺だって、今一歩頭がついていかない。
だってそれは……
「成績が良い方が変わったら…」

「当然のように、自分の子供をコロコロ変えるんだ…！」

ドンッ！

空いていた左手で、鈴木さんは卓袱台を殴る。
心配する俺達を見ると、すぐにその手を引っ込めて謝った。
俺達は首を横に振った。
しばらくして、エアルが口を開いた。

「…2人に、拒否権は、ないの？」
「翔曰く、無いらしい。何か、されてるのかもしれないけど、あいつは話そうとしないし」
「っていうか、優れた子を選ぶなんて事に何の意味が？」
「さぁ？」
「『さぁ？』って…」
「それを知ったところで2人がバカな大人の手から免れるとは思えないし、もっとひどい事になるのかもしれない。安全が保障できない以上、下手な詮索はできないよ」

……。
……む？

「鈴木さん」
「何？」

俺はポケットからあるお守りを取り出す。
月曜日、鈴木さんから手渡されたソレだ。

「鈴木さんはコレを、俺に怪我をしてほしくないって渡してくれま

したよね？」
「うん」
「稜ちゃんは『争いを治める物』って言ってましたけど、どういう事ですか？」
「……その、まんまの、意味だよ」
鈴木さんは笑った。
「君なら、どうにかしてくれそうで…。ごめん、こんなの、他人に頼むような事じゃないのに…」
「いいんじゃないんですか？」
えっ、と驚きを顔に出す目の前の青年に、俺も、笑う。
「どうも話に足を突っ込みすぎると、ほっとけなくなる性分なんですよ」
隣でエアルが、損な性格ね、と笑った。
「俺なりに、分からないなりに、頑張ってみますよ」
「……ありがとう」

玄関。
そろそろ帰らなければいけない。
店をみんなに任せっぱなしで来ちゃったし。
「おじゃましました」

「また来てね」
「……鈴木さん、一ついいですか？」
「何だい？」
「稜ちゃんは、鈴木さんと違う父親との子なんですよね…？」
「…あぁ」
「じゃあ、何で小松翔が…？」
「ごめん、そこら辺の事を翔は教えてくれないんだ。知りたいんだったら…」
鈴木さんは、すまなそうな顔をした。
「…翔に、会ってくれないか？」

―16　鉄則（後書き）

ややこしいわ！
今回のお話の内容に対しての感想。
要は「稜ちゃんか翔くんが人柱（笑）にされちゃう」って分かればおｋ

―17　弟（前書き）

ふむ…。

特に書く事は無いなっ！←オイｗｗ

―17　弟

「…って訳なんだよ」
「損な性格ですね」
「…いい度胸してんな」
「じゃなきゃボクシングなんてやってませんよ」

時刻はもう夕方と呼ばれる時間帯になっていた。
西高で会話をするのはいささかやり辛いという俺の気持ちを汲んでか、場所はファミレスへと移っていた。ちなみに席は窓際。
雨は止む事無く、ザーザーと地面を叩きつけている。

「っていうかお前、意外と人望あるんだな」

俺は目の前に座る少年に話しかける。
彼は少し頭にきたようで、

「意外って何ですか、意外って」
「どっちかっつーと後ろでウジウジしているタイプの人間かと…」
「ひどいっ」

若者らしく快活に笑う俺達。
その光景に他のお客さんがジロジロ。

「……ゴホンッ」

恥ずかしそうに、咳モドキ。

小松翔。

容姿は俺と同じでショタっぽい印象。
だが、目つきの穏やかさはどっかの常連客と酷似していた。
そういやあの人は稜ちゃんとはあんまり似てなかったな。

「で、その話をしたからには、何か知りたい事があるんですか？」
「ある。
単刀直入に聞くぜ。

お前、どうしたいんだ？」

「……どういう…」
「お前ウチの部長に負けてるらしいな。
小松家的には、お前は家族の子供としてはアブナイ位置に来ているわけだ。
そして稜ちゃんは茶道検定で一級を取っちまった。
お前が今回俺に負ければ、確実に稜ちゃんは…」
「分かってます」

彼は飲んでいた水をゴトンと置いた。
目が合う。
その目は、敵意に満ちていた。

「だから、貴方に勝ちます」
「……。そうすれば、お前は自分が嫌っている親とまた過ごすんだぜ？
稜ちゃんにその重荷を押し付ければ、お前は自由に…」
「貴方は！！」

ズガンッ。
翔はテーブルを力の限り叩いた。

つーか割れていた。
分厚い木材が真っ二つだった。
店員が悲鳴をあげ、他の客の死線が集まる中、翔は立ち上がり話し続ける。

「貴方はっ！
あの場所の痛みを知らない…。
温もりも冷たさも感じない、ただ何も無い場所だ…。
学校の友も信じられなくなり、失いたくない物も失った。
大切に想ってる女も手放さなきゃならなかった！
何もかもを与えられ、何もかも手に入れる事の出来ない場所なんだ！
そんな場所に、そんな場所に…！

稜を置いていられるわけ、ないじゃないですかっ！！」
「それでもっ！」

俺も負けじと声を張り上げる。
俺の怒声に我を思い出したか、翔は怯えた目でこっちを見た。
俺は手にあるお守りを固く握り締めて、苦し紛れに言葉を吐く。

「鈴木さんは、お前にあそこにいて欲しくないんだ…」
「っ！」
「そんだけ稜ちゃんを想っているのなら、分かるだろ？
大事な奴が、辛い思いしてんのに助けられない痛み。
お前の元カノもそうだったよ…。
助けたいのに助けられなくて、体を蝕むような痛みを、背負ってた！」

黒いヘンテコな帽子を被って、人に煙たがれるような喋り方をしなきゃ、自分を保てなかった少女。
涙を流していた彼女は、暴走せざるを得なかった。
そう、壊れてしまうんだ、人間は。
たった一人で戦ってたら、自分じゃなくなるんだ。

「お前がどう思っていようが、どう考えていようが！
お前を助けてぇって思ってる奴はいるんだ！
だから俺は、今度の試合、ぜってえ負けねえっ！」

……。
店内が静まりかえる。
沈黙に次ぐ沈黙。
この状況を破ったのは目の前の少年だった。

「……そっちの事情なんて、知りません。
僕は僕で、稜を守ります」
「くっそ…！」
「それでは僕はこれで…」

そう言って、翔は雨の中を傘も刺さずに出て行った。
……いやしかし、何故俺はこんなにめんどくさい状況に巻き込まれているのだろう？
分からない。分からないが…。

あの兄弟を何とかしてやりたいと思う俺がいるんだろうな。

意味が分からないと思ってくれて結構。
俺にだってワケワカメだ。

だけど…。

「俺は……」

「すみません」

ん？

なんか女性らしき人に声をかけられた。

あー、そっか。

さっき翔の奴にテーブルぶっ壊されたから、俺が襲われてるとでも思ったのかな。

…フフ。

やはり、俺からは滲み出ているのだろうな。

圧倒的なハーレム主人公体質が…！

「はい」

「はい？」

「こちらが、お客様が壊したテーブルの弁償代です」

「……へ？」

「だから弁償…」

俺はウェイトレスと向き合うのをやめ、振り返る。

そこにあるのは残骸。

テーブルだった物。

……。

「い、いや、壊したの、俺じゃないっスよ！？　おねえさん、見てたでしょ！？」

「お客様のお連れ様が壊したのですよ？　そのお連れ様が帰ったのですから、もちろんそのお友達であるお客様がお支払い…」

「おかしいでしょ！　明らかに俺無罪だし！」

「知るか」
空気が張り詰める。
重くなる。
逃げたくなる。
そういうオーラが、目の前の女性にはあった。
…え？
「お前が無罪とかそうじゃないとか、どーでもいいんだよ。
金。
寄こせ」
……。
本当に、何でこんな事になっちまったんだろうなぁっ！？（泣

※　※　※　※　※　※　※　※

「可憐アンタもおかしな事に巻き込まれたわねー」
「蓮香…」
散々泣きに泣いた私は、駆けつけた先生に適当に事情を説明して、
同じ家庭科部の同級生の蓮香と下校中です。
というか、泣き疲れました。
我ながら、ヘンテコな一日だったなぁと思います。

だって、憎しみの対象だった少年に諭されて泣くなんて、そんなラノベの主人公じゃあるまいし。

「？　どしたの？」

蓮香が首を傾げました。

「何でですか？」
「だってアンタ、

楽しそう」

「うーん、まぁ、楽しいです」
「そう、それは良かった。
東高の奴ら襲撃してこいなんていわれた日には驚いたけれども…」
「その件はごめんなさいです。
私、どうも気が狂ってたみたいで…」
「いいってことよ。
どうせ被害を蒙ったのはボクシング部、しかも重症なのは脳足りんな坊主だけだから」
「うん」

話しながら歩いていると、自分の家の前まで来ていました。
下校って、友達と話し込むと時間経つの早いですよね。
私は玄関で彼女に手を振った。

「また明日です」
「うん。しっかり寝なよー」

私の目の下のクマを見てか、蓮香はそんな事を言いました。

やっぱりすごい子です、と思いました。
必要な言葉だけを、必要なときに言ってくれます。
そうすれば、人は安心感を得られます。
何で、昨日までの私は彼女の言葉を聞けなかったのでしょうか。
少しでも耳を傾けていれば、私は人を傷つける事はなかったのに…。

憎しみや強い傲慢は、自身に歯止めを効かせられなくなる。
今の翔君は、そういう状況にあるのでしょう。
それが、今一番悲しかったです。
…でも。

「私にも、やれる事があるのでしょうか……？」

私は制服のポケットからとある紙を取り出します。
一般的な名刺です。
ネズミのイラストが描かれたそれには、電話番号と住所、そしてこれを私のトンガリ帽子に入れた人物の名前があります。
そして殴り書きで…。

「…どこのホストですか貴方は…」

そういう私の頬は、緩んでいた気がします。
名刺には、

『家に帰ったら電話してくれ。翔の事で頼みたい事がある』

私は何かができるかもしれないという希望に、どきどきを抑える事が出来ませんでした。

―17　弟（後書き）

やっと一日が終わりました。
こんなに長くなる予定はなかったんですが…。

次回を境に、物語はクライマックスへ向かいます。
怒涛の展開お楽しみに＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4892l/

マウス☆ピース

2011年10月7日03時26分発行